

# 天道と人道

— 二宮尊徳研究(1) —

下 程 勇 吉

## 目 次

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 1 前篇 人道の諸形態     | 2 中篇 天道と人道との相関関係      |
| (一) 政刑礼法としての人道  | (一) 天命の伸縮・年切り論        |
| (二) 民生尊重の人道     | (二) 天道の優位性            |
| (三) 勤勞としての人道    | (三) 「非・理・法・権・天」——魚と水  |
| (四) 推諉としての人道    | (四) 「木かげにも道のありける月夜かな」 |
| (五) 分度(儉)としての人道 | (五) 「百万騎の勢」の天道        |
| (六) 勤儉讓婦一の報徳道   | (六) 「善惡の行司」としての天道     |
| (七) 三教婦一説       | (七) 天の一視同仁的感応性        |
|                 | (八) 空仁一体の天            |
|                 | (九) 天道と人道の切点としての身体    |
|                 | (十) 身体と天命             |

## 1 前篇 人道の諸形態

## (一) 政刑礼法としての人道

二宮尊徳の教説において先づ、「天道に半ば逆らい、半ば順う」人道のうち、その典型的なるものは、政刑礼法としての人道である。

政刑礼法としての人道なるものは、その成立過程から云えば、「聖人が立てし人道」であり、「神聖の立てたまひし道」である。その限り、「荻生徂徠のいわゆる「先王の造るところの道」である。天道と区別せられる意味の人道を説いた点で、二宮尊徳は荻生徂徠と軌を一にするかのごとく説かれるのであるが、両者は全面的に軌を一にするのであろうか。

終始一貫、尊徳が天道対立の人道の重大性を力説せざるを得なかったように、人間が人道を全くすることは、容易ならぬことである。その生涯あげてその道を貫いた尊徳が、七十年の生涯を了える年の前の大晦日の日記に「千秋万歳楽、予が足を開け、予が手を開け、予が書翰を見よ、予が日記を見よ、戦々競々、深淵に臨むがごとく、薄氷をふむがごとし」(全五、1104)と論語泰伯篇の曾子の語に即して書き残した所以である。しかし、主体的に心を尽してよく一もって貫くだけでなく、客体的にも政刑の体制を立てなければ、人道は維持できないのである、夜話2に曰く、「人道は、たとえば、料理物のごとく、三倍酢のごとく、歴代の聖主賢臣料理し、塩梅あんばいしてこしらえるものなり。されば、ともすれば、破れんとす。故に政を立て、教を立て、刑法を定め、礼法を制し、やかましくうるさく、世話をやきて、ようやく人道は立つなり。然るを天理自然の道と想は、大なる誤なり、よく思ふべし」というのも、人間は身体的欲情に駆りたてられて、我が身勝手の反社会的行動に走り、奪道に身を任せるからである。そこから反社会的行動を取締る政刑が必要欠くべからざるものとなるのである。「それ元一円の渾沌なり。混沌清濁して、天地となる、日月あらわれて、昼夜をわかす。雲発して雨を降す、風発して雲を散し、しかうしていまだ地開けざること万歳、天津神の御

世ともいうなるべし」と書き起す「万物発言集」の一文には、ついで雨露のしたたりに苔を生じ、さらに草・竹木を生じ、ついで虫魚・鳥獸を生じ、ついで人間生じ、「水辺湿地を開き、畔を立て、田と名付けて、稻を植え、乾地を開き、畠と名づけ、諸草を植う、これすなわち発田のはじめ、法界の根元なり。田畠開けて、五穀熟し、食物足りて、人道定まる、人道定まりて、父を知り、父子の大道立つ、および兄弟夫婦朋友の四倫の道行わる。ついに横道の者出来、人倫の道を破る、これによって、君臣の大道立て、耕作農業をなして五穀を作り出す者を守護し、横道の者を懲しむ、これすなわち武門の根元なり。これより五倫の道ますます明かなり。その後、ついに流れて天竺(印度)には仏出生して、その法を定め、人民を導き、唐土には聖出生して、その法を定め、人民を導き、吾が朝には、神出生して、その法を定め、人民を導き、その法、三国異風同道なり。天地開闢、発田より今日に至るまで、人国法界となりぬ」(全一、338~9)と説かれ、さらにほぼ同じ内容を説く一文には、かかる法界の造立者として、原本的には、天照大神をあげ、さらに近世に降って、徳川家康をあげているのであるが、秘稿下28には要約的に次のごとく説いている、「上古、人倫、鳥獸と同じく、食を求むるのみ、食を求むるために、農業の道始まる。農業をなして、衣食足れば、禽獸、田畑を荒し、盜賊、衣食を奪う。故に強き者を立て、君とし、乱妨を防がしむ、これ武の始めなり。」

先王の道を説いた「古今辞」を金科玉条とした荻生徂徠と異り、心に触れるところあれば、市井の野人匹婦の言をも書とめた尊徳は、次のごとく記している、「江戸西久保出入りの塩売りの親父(おやじ)の曰く、『一日持つことなれば、直ちに一日後れて、間に合わず』と。彼一人にあらず、天下の人民、銘々同じことなり。天地の命令によって、生育をなすといえども、法度なきものは、鳥獸虫魚一日は一日、一時は一時づつ後る、天地みな同じ事なり。人間はかたじけなくも天祖天孫、武祖武尊、祖先元祖の丹誠にて、城・家・蔵・土手・堀・舟・橋、そのほか有るもの、形なき法度にいたるまで立ておかる。故に我が物と人の物との境あり、困かこに仕舞い、これを求め買ひ、我が身のな

らざることまで、自在なるは、法度ある故なり。よくよく弁え知るべきことなり」(全一、553~4)。さらに天地開闢より万物生じ、人間生れて、天祖の丹誠により人界立てられることをのべた他の論稿に曰く、「君子は法界を法界となして、法礼を犯さずして、法礼を守る。つねに法礼を覆えすものは、法界に居る(小)人の道なり。小人は、常に法礼を犯し、法界を破り、畜界に落ち入り、畜心となりて、人界憂なり」(全一、395)ここでも、政刑としての人道の創始者は、天照大神である。

かくして、人道の法界を小人の非道から守る政刑とともに、人倫界に必要なものは、いわゆる礼法である。夜話122曰く、「山畑に粟・稗法のるときは、猪・鹿・小鳥までも出で来りて、これを取り食う、礼もなく、法もなく、仁義もなし、己々が腹を養うのみ。粟を育てんと、肥をする猪・鹿もなく、稗を突のらせんと、草を取る鳥もなし。人にして礼法なき、何ぞこれと異らん。予が戯れに詠める歌に、

秋来れば山田の稲を猪と猿

人と夜昼争いにけり

(検分) (役人) (地主)  
それ検見に来る地方官は、米を取らんがためなり。検見を受くる田主も、作徳を取らんがためなり。(小作人) 作主は、もとよりなり。されども、みな仁あり、義あり、法あり、礼あるが故に、心中には争えども、乱には及ばぬなり。もしこの三人のうち、一人仁義礼法を忘れて、私欲を押し張らば、たちまち乱るべし。世界は、礼法こそ尊けれ。」さらに比喻に巧みな尊徳は、夜話179で次のように説いている、「礼法は人界の筋道なり。人界に筋道あるは、たとえば、碁盤・将棋盤に筋あるがごとし。人は、人界に立ちたる筋道によらざれば、人の道は立たず。碁も将棋も、その盤面の筋道によればこそ、その術も行われ、勝敗もつくなれ。この盤面の筋道によらざれば、小児の碁・将棋を弄ぶかごとく、碁も碁にならず、将棋も将棋にならぬなり。故に、人倫は礼法を尊ぶべし。」

かくして人道としての政刑礼法の道は、他の人道とともに、天道自然の道ではなく、人為作の道であるとして、次のごとく云われるのである、「人

道は、たとえば料理物のごとく、三倍酢のごとく、歴代の聖主賢臣料理し塩梅して、こしらえたるものなり。されば、ともすれば、破れんとす。故に、政を立て、教を立て、刑法を定め、礼法を制し、やかましく、うるさく世話をやきて、ようやく人道は立つなり。然るを天理自然の道と思うは、大なる誤なり。よく思うべし」(夜2)。それでは、「やかましくうるさく」すれば、それだけでよいのであろうか。

以上のごとく、尊徳は、人界は法界であるとして、政刑礼法としての人道の重大性を説いたのであった。これは多年頑民や惰民と交渉をもった尊徳として当然のことであったといわねばならない。かかる立場から、尊徳は語録298の前半において次のごとく説いている、「人世は法界なり。よろしく法制を厳にすべし。物、微なれば、すなわち制し易く、やや大なるに至らば、制し難し。たとえば、一点の火は手にてこれを滅すべきも、延焼するに至れば、すなわち衆力を用いるも、また撲滅すべからず。頑民法を犯すも、また然り。不孝を戒しむるときも、その兆を見れば、すなわち急ぎこれを警しめ、太甚に至らざらしむべきなり。これを緩うして、大不孝に至りて、然る後に、これを刑する、いわゆる『令を慢にして期を致す』は、政治家のよろしく戒しめるべきなり云々。」すなわち事が乱れる兆あるときには、きびしく政刑礼法を正すべしとする、尊徳は、また同時に、刑法厳罰主義に止まる単純な法家ではなく、民心の機微にも深く通ずる心理学者でもあったのであった。教林77において、村民撫育について、次のごとく説かれている、「犬にても、猫にても、毛なりになでてつかわせば、心持よがりて眠りを催す。御仕法も、その通り。順よくなでてつかわせば、子細ない。逆なでにしては、ゆかず。孝行奇特人、あるいは耕作出精人などの善人より、撫育するなり。不行状の者を先づそのままにしておく。とはいえども、極悪人は別なり。」さらに夜話残篇15に曰く、「宇津氏の馬、厩を離れて邸内を馳せ廻れり。人々大いにさわぎ立ちけるとき、別当出で来りて、『静かにすべし、静かにすべし』と云いて、飼馬桶をたたきて、小声に呼びければ、さすがに猛くはねまわりし馬、急に静まりて、飼葉につけり。翁曰く、『汝等よく心得

よ、世の中は、何もむつかしきこと、決してなし。狗も、来いよ、来いよと云うばかりにては、来ず。時々食をもつて呼ぶときは、速かに来る。茄子も、なれ！ なれ！ と云って、なるにあらず。肥をすれば、必ずなる。猫の背中も順に撫でれば、知らぬふりして、眠り、逆に撫でると、一撫でにて、瓜を出す。<sup>(私)</sup>予が桜町を治むるも、この理を法として、勤めて怠らざりしのみ。」

かくして、政刑礼法としての人道は、一方では、法を破る者に対して、厳しい態度をもって、その逆流を制し正すとともに、他方同時に人々の心理の流れに順って事をはこぶことを旨とするのである。すなわちここでも順逆相須つ道がとられるのである。そこから上に引いた語録298は政刑を厳にすべしと説くその前半をうけて、その後半は次のごとく説いている、「賭博を戒しむごときも、<sup>(村の祭)</sup>里社祭祀にして銭を得るの時、および閑暇遊樂の日、大いに<sup>(名主)</sup>里正を誠しめて曰く、『心を賭博に動かす者あらば、汝これを探ぐり、これを縛し、もつて告ぐべし』と。吏、もし賭場を<sup>(しぼる)</sup>経ば、陽に知らずとなして、過ぎるべし。何となれば、賭者を認めれば、すなわち縛せざるを得ず。これを縛せば、すなわち罰せざるを得ず。<sup>(俗歌)</sup>俚歌に曰く、『農夫、種を蒔けば、鶯<sup>(鶯)</sup>を<sup>(鶯)</sup>驚<sup>(鶯)</sup>す、三度に一度は、追わずば、なるまい』と。その語、浅陋のごとしといえども、しかもはなはだ深意あり。国君の政を布くは、なお農夫の種を蒔くがごとく、頑民の法を犯すは、なお、鶯鳥の発啄するがごとし。政治家は深く『三たびにして一度は、業を捨て、これを逐う』の意を玩味して、時にこれを懲し、時にこれを戒しめ、斯の民をして罪に陥らしめざれば、すなわち<sup>(行政官)</sup>人牧の任に堪うと謂うべし。』夜話135の後半にも曰く、「諺に『<sup>(役人)</sup>権兵衛種を蒔けば、鳥これを掘る、三度に一度は追わずば、なるまい』と云えり。これ鄙俚戯言といえども、有職の人は知らずばあるべからず。それ鳥の田圃を荒らすは、鳥の罪にあらず。田圃を守る者、追わざるの過なり。政道を犯す者のあるも、官、これを追わざるの過なり。これを追うの道も、また権兵衛が追うをもって、勤めとして、捕うるをもって本意とせざるがごとく、ありたきものなり。その戯言、政事の本意に<sup>(俗世間)</sup>適えり。鄙俚の言といえども、心

得ずば、あるべからず。』まさに政刑礼法の半車の動きに順うとともに、人間心理という他の半車の流れにも掉し、その間順逆相俟ち一円全きを得てこそ、真の人道としての政刑の道が成立するのである。(夜話三の水車のたとえ参照)以上のごとく、政刑礼法の道としての人道を説く点では、尊徳の立場は徂徠の立場に一脈相通ずるものがあるものであるが、次に見るごとく、本質的には両者の立場は大きく異なるものがあるのである。

この問題について、別の章において立ち入って論ずることとし、今は、徂徠の代表的著述『弁道』の一節を引き、そこから両者の根本的区別を略述するにとどめたい。

徂徠は「弁道」四において、「先王の道は、先王の造るところなり、天地自然の道にあらざるなり。けだし、先王、聡明睿知の徳をもって、天命を受け、天下に王たり。その心は、一つに、天下を安んずるをもって、務めとなす。ここをもつて、その心力を尽くし、その知巧を極め、この道を作として、天下後世の人をして、これに由りてこれを行わしむ。あに天地自然にこれあらんや。<sup>(中国の伝説上の天子)</sup>伏羲・神農・黄帝も、また聖人なり、その作為するところは、利用厚生<sup>(敷ける)</sup>の道に止まる。顓頊・帝嚳を歴て、堯・舜に至り、しかる後、礼楽はじめて立つ。夏・殷・周よりしてのち、粲然として始めて備る。これ数千年を更て、数聖人の心力知巧を更て成るものにして、また一聖人一生の力のよく弁ずるところのものにあらず。故に孔子といえども、また学んで、しかるのち知る。しかるに天地自然にこれありと謂いて可ならんや」と説くのであるが、上に見たごとく、尊徳も農政治家として政刑礼法の政治的社会的重大性を十分理解していたからこそ、勤儉讓中心の人道とともに、政刑礼法を人道の一環としてあげたのである。しかしながら、彼は徂徠のごとく堯・舜に至って成立した政刑礼法の道こそ先王の造る人道の本質・核心とするのではなく、「伏羲・神農・黄帝の作為するところは、なおかつ利用厚生<sup>(敷ける)</sup>の道にとどまる」と徂徠が説いたその利用厚生<sup>(敷ける)</sup>の道をもって、人道の本質・核心としたのであつて、政刑礼法はそれを補足するいわば第二次の人道としたのであつた。そこに一見相似たと思われる両者の天道・人道観の本質的相違があるの

である。古文辞学者荻生徂徠は、終始中国古代の先王の政刑礼楽の道を説きつづけたのであるが、「故道につもる木の葉をかきわけて、天照す神の足跡を見む」とする二宮尊徳は、ひたすらに庶民の福祉厚生を推進する人道に身を献げたのであった。

(二) 民生尊重の人道

「我というその大元を尋ねれば、喰うと着るとの二つなりけり」という身体性中心の人間学を終始その哲学と実践の出発点としていた二宮尊徳は、天保四年一月二十日に（全一、493）

豊年の秋の最中の麦まく時は

仏にまさる悟なりけり

未来の沙汰を悟りてそする

腹くちく喰うてつきひくあまかかも  
(\*をつき)(うすをひく) (主編)

仏にまさるさとりなりけり

未来の沙汰を悟りこそする

喰えば減り減ればまた喰い、せからしや

長きたもちのなきぞ此の身は

と詠み、こえて同年二月一日にも（全一、504）、

喰呑みと着ると住居の三つの徳

忘る罪にぞこの身はせまりけり

喰呑みと着ると住居の三つの根に

花さきみのるこの身なりけり

と詠み、二月七日には（全一、510）、

誰も彼も心の糸は長けれど

暮る日毎につまる己が身

と詠み出たのであった。夜話125に曰く、「衣は寒さをしのぎ、食は飢をしのぐのみにて足れるものなり。そのほかは皆無用のことなり。官服は貴賤を分つ目印にて、男女の服はただ粧いのみ、婦女子の紅白粉と何ぞ異らむ。

紅白粉なくとも、婦人あれば、結婚に支えなし。飢をしのぐための食、寒さをしのぐための衣は、智愚賢不肖を分たず、学者にても無学者にても、悟りても迷うても、離ることは、できぬものなり。これを備うる道こそ人道の大元、政道の本根なり。予が歌に、

飯と汁木綿着物ぞ身を助く

その餘は我をせむるのみなり

と詠めり。これ我が道の悟門なり、よくよく徹底すべし。予、若年より食は飢をしのぎ、衣は寒さをしのぎて、足れりとせり。ただこの覚悟一にして、今日に及べり。我が道を修行し施行せんと思うものは、先づよくこの理を悟るべきなり。」（なほこの点に関しては、語録318参照）

さらに夜話は衣食住を全くする人道の重大性を自覚することをもって、「我道の悟門」どころか、「悟道の極意」とまで強調するのである、夜話116は、上にあげた「喰えば減り云々」の道歌を掲げて曰く、「屋根は銅板で葺き、蔵は石で築くべけれども、三度の飯を一度に喰いおくとはいえず、やがて寒さが来るとて、着物を先に着ておくということもできぬ人身なり。されば長くは生きられぬは、天命なり。

腹くちく喰うてつきひく女子等は

仏にまさる悟なりけり

我が腹に食満つれば、寝ているは、犬猫をはじめ、心なきものの常情なり。しかるに食事をすまずと、直ちに明日喰うべき物をこしらえるは、未来の明日の大切なることをよく悟る故なり。この悟こそ、人道必用の悟なれ。この理をよく悟れば、人間はそれにて事足るべし。これ我が教、悟道の極意なり。悟道者流の悟は、悟るも悟らざるも、知るも知らざるも、共に害もなし、益もなし。

我というその大元を尋ねれば

喰うと着るとの二つなりけり

人間世界のことは、政事も教法も、みなこの二つの安全を計るためのみ、その他は枝葉のみ潤色のみ。」秘稿上62も、同じく上掲の二つの道歌をかけた

て、その結論として次のごとく説いている、「それ、己が腹に満ちて、食事を忘るは、凡人の常情。しかるに、腹くちく食うて、また明日の食のことをなすは、仏も及ばぬ悟なり。これよりほかの悟は、悟と云うとも、迷と同じ。これが実に、悟の極意なり。」まさに人々の衣食住を維持する人道の重大性を自覚することこそ、「我が教、悟道の極意」であり、「悟の極意」であるとせられるのである。

まさに「重んずべきは、民の米びつなり」である。かかる悟道観を胚胎する心情を尊徳は次のごとく説いている、「それ貧家の雪隠の無きを眼につかざる者は、居所低くければなり。居所高ければ、必ず貧農の雪隠のなきを気の毒に思ひ、直ちに眼がつくなり。如何となれば、高山に止まらざれば、谷底見えざるの理なり。己が居所低き小徳の者、何ぞ貧家を見ること能わん。貧家の雪隠の無き、米びつの米なきを心苦とする者は、これ大徳高居の人なり」(秘下、295)。かく説くとともに、尊徳はまた次のごとく説いている、「この道、己をおもいやりて、行方を要とす。貧民に代りて、彼が心になつて、この道を行ふ。家を与え、屋敷を作り、衣服を与え、夫食を与え、農具を与う。上より見れば、要らざるがごとし。彼になつて見れば、ことごとく身命にかえて願うところなり。故に、無利足金は貸者何ぞ益とせん。ただ借りる貧人になり替つて見れば、無利足にて助かること、限りなし。故に彼が心を恕して行ふものなり」(秘下、196)。まさに真の民生尊重の精神は、高邁忠恕の心より出て、「悟道の極意」に属している。

しかもかかる高邁忠恕の民生尊重的政治哲学を抱いて前後十五年間の桜町仕法に着手した尊徳は、その発端の精神を次のごとく吐露している、「この四千石の地の外をば、海外と見倣し、吾れ神代の古に、農葦原へ天降りしと決心し、皇国は皇国の徳沢にて開く道こそ、天照大神の足跡なれと思ひ定めて、一途に開闢元始の大道によりて、勉強せしなり。それ開闢の昔、芦原に一人天降りしと覚悟するときは、流水に潔身せしごとく、潔きこと限りなし、何事をなすにも、この覚悟を極むれば、依頼心なく、卑怯卑劣の心なく、何を見ても、うらやましきことなく、心中清浄なるが故に、願いとして

成就せずといふことなきの場に至るなり。この覚悟、事をなすの大本なり、我が悟道の極意なり。この覚悟定まれば、衰村を起すも、廃家を興すも、いとやすし。ただこの覚悟一つのみ」(夜、134)。まさに一円空にして清浄潔白の身に帰り、一円仁にして人々のためにつくす人道において、尊徳は中国の古聖人ではなく国祖神天照大神につながるのである。

### (三) 勤勞としての人道

かくして尊徳においては、人道なるものは、客体的には政刑礼法・民生尊重の道の意味するが、主体的には、何よりも先ず人間の身体的生命を維持するための勤勞労作の道の意味する。人間はその身体的生命を維持する勤勞を一日も離れ得ぬ存在である。人間界一切の問題の根源は、身体我の要求にあり、その要求を充す衣食住の問題そのものである。尊徳が「もつとも重んずべきは、民の米櫃なり」(夜、136)と端的直截に福祉国家的理念を掲げて、その実現に七十年の生涯を捧げた人間学的根柢は、人間の身体性そのものにあるのである。秘稿下77に曰く、「人身の元を悟れば、羽もなく、手もなく生れたり。これ天命なり。衣を製して着るだけ、私道なり。また雨の降る世界に生れたれば、雨にぬるべきが、天命なり。然るを、家に入りて、凌ぐ。これまた、虚道なり。人事万端、此のごとし。人の勝手よきを道という。元、自然とは別なり。」

しかも衣食住を全くする勤勞の人道は、そのはじめ聖人によって「天道に逆らいて」立てられたとせられるのである。教林23に曰く、「人は裸にて生れ出る故、裸にて暮し、木の実など有るときは、存分食らい、無きときは、餓死す、これ天道自然の道なり。雲助など、裸にて暮し、百文あれば、百文つかい、二百文あれば、二百文つかう、これ自然の常道を行ふとも云うべし。それでは、ゆかざる故、聖人、天に逆らいて、人道を立てたまひ、着物を作りて、身にまとい、寒暑をしのぎ、家を作りて風雨をしのぎ、五穀を作りて、飢をしのぎ、しかして人間、安泰に生をとぐることを得る。さて人の手にて作りたるもの、一切破壊せざるものなしと心得て、破れたらば、つく

ろい、破れざるようにつとめる、これ人道なり。」さらに秘稿上241において、尊徳はこの点を次のごとく委曲をつくして説いる、「鳥獸虫魚、みな羽毛あり、もつて雨露を凌ぐべく、もつて草食すべく、天地と共に行き、寒暑共に相い生養す。<sup>(生命を保つ)</sup> 万古の前も、かくのごとし、万古の後も、かくのごとし。ただこれ人倫<sup>(人間)</sup>の生れながらにして、羽毛なく、衣にあらざれば、寒暑を凌ぐあたわず、家にあらざれば、雨露ぐあたわず、米粟火食にあらざれば、生を保つあたわず、この道なければ、一日も安然と生養するあたわざる、あわれはかなき身体を安んぜんために、神聖この道を立てたまひ、木は山に生ずる天理なれども、これを伐りて家となし、雨露を凌ぐ、原野草芒たる自然なれども、これを墾開して田圃となし、もつて生を養ひ、衣服を制して、寒暑を支え、はじめて相い生養安居することを得。しかる後、幾万世となく、人倫この道を勤むるにあらざれば、飢寒の責<sup>(責苦)</sup>、至る。怠らず止まずして、もつて万世に至り、羽毛なき身を安んずるを得、これ神聖の賜なり。しかるをこの法界に生れ、米を食ひ、家に入りながら、勤むることを知らず、家破るれば、作りたるは破る、天理なりとし、雨ふれば、漏るを天理なりと自得し、これを悟道と称するものあり。これ、何事ぞ、己がはかなき裸体を安んぜんがため、神聖の立てたまひし道にもとる神聖の罪人なり。かくのごとき者は、殿に制戒して可なり。裸にして雨夜に外宿し、米粟を食わずして、安んぜらるれば、しかる後、悟道を云うべし。いやしくも家に入り、米を食して、<sup>(生活)</sup>生養せば、神聖の道に従いて、家は修復し、衣を作り、田圃を耕すの人道、一日も怠るべからず。」五十八才の尊徳は「農家大道鏡」において、「凡そ人間の道は、衣食を作り出すにあり、その潤沢をもって、身命を養うにあり、(この)至善に止まるにあり」(全一、902)と説いている。

ここで注目すべきことは、二宮尊徳においては、荻生徂徠の場合と同じく、人道は天地自然の道ではなく、「聖人が立てし人道」(教、21)であり、「神聖の立てたまひし道」であり、「法界」であり、徂徠のいわゆる「先王の造るところの道」であるが、それは徂徠が絶対視した礼楽政刑の道ではなく、「家は修復し、衣を作り、田圃を耕すの人道」である。この点で、徂徠

的の人道に対する尊徳の人道の特色を明確に示すものは、語録364であろう、曰く、「天地、もとより増減なし、故に生滅なし。禍福吉凶に増減あるは、ただそれ循環するのみ。なお鶏は卵を産み、卵はひなとなり、ひなは鶏となり、鶏また卵を産み、一日も止むことなきがごとし。聖人増減なきの天地の間に生れ、人道を立て、もつて増減をなす。故に人の道たるや、情れば、すなわち滅じ、勤むれば、すなわち増す。耕耘せざれば、すなわち百穀登らず、蚕織せざれば、すなわち衣服成らず、構営せざれば、すなわち家屋就らず、故に斯の世にある者、いづくんぞ勤めざるを得んや。」終生書架をはなれなかつた古文辞学者荻生徂徠物茂卿の説く人道は、政刑礼楽中心主義であり、生涯農耕に徹しぬいた野の民政家二宮金次郎尊徳の行じた人道は、勤労生産中心主義であった。

のみならず、徂徠は人道造立者として中国の先王を仰ぐが、尊徳は人道開闢者として天照大神をあげ(全一、347、夜、134)、「天照大神宮様は、田も畑も、鎌も鋏も、何も無い所へ天降り在まして御丹精遊ばされたのじゃ」(全三六、1111)と説き、ここに「故道につもる木の葉をかきわけて、天照す神の足跡を見む」としたのである。秘稿下409にも曰く、「野原に一人生じて、左右人なき時は、飢えて食ひ、渴して飲み、<sup>(つかれて)</sup>勞して寝、覚めて起き、穴に入りて雨露を凌ぐのほか、求むるところなし。これすなわち天道自然にして、今の畜道なり。はじめて人心起りて、明日のために、今日の残りを貯えて、一日を稼ぎ出して、二日に譲る、これを人道という。天照大神、己を譲りて、恕したまう御恵みによりて、かくのごとく豊葦原を安国となし給ひしなり。よって、異国外国より儒仏の道渡りて、天祖の丹誠を忘却す。儒仏、元、たとえば木の葉の落ち積り、道を埋めしごとく、天祖の道を埋めたるなり。今人も各々先祖の丹誠を忘れ、驕奢華美に流れ、遊芸に戯れ、家業に怠り、終に困窮に陥る。各々先祖の歩み行いて、かくのごとく、安楽自在になりたる本道を勤めなば、艱難におちいるを免るべし。国荒蕪しなば、天道の丹精を尋ねさがして、天命自然に基づきなば、廢国興起すべし。かくのごとく開けて、その始め異国より金子の来るにもなくして、成就したるなり。

古道の歌、

古道に積る木の葉をかきわけて

天照す神の足跡を見む

云々。」かくのごとく、今日の労作の成果を明日に譲る自謙の勤の道において、「聖人、天に逆いて、人道を立てたまう」としながらも、荻生徂徠と異り、尊徳は特に日本国における人道の開闢元始者として、天照大神を想起し、勤としての人道の根源的代表的なものとして、農業の道をあげているのである。

もともと「世界のうち、法則とすべき」「両全完全のもの」は、「天地の道と親子の道と夫婦の道と農業の道との四つ」であって、報徳仕法は「天地生々の心を心とし」、この四つの道を法則とするものであると(夜、42)、尊徳はつぶさに説くのであるが、この四つの道のうち、はじめの三者は、「天性自然」に属しているが、農業の道は自然の道ではないというのである。農業の道も「農夫勤勞して植物の繁榮を楽しみ、草木また欣々として繁茂する」両全共悦の道であるが、それは天性自然の道ではなく、天道自然に対立して、地を開き、種を植え、作物を育てる人作人為の人道なのである。しかし尊徳の場合、人道の天道対立性はどの程度なのであろうか。それは、二律背反的なほど、きびしい対立であらうか。

とかく世上一般の尊徳解説者は、天道対立一辺倒的人道思想を尊徳の専売特許のように説くのであるが、その実、尊徳は全面的に天道に対立する人道を説くようなドンキホーテではなく、「半分は天道に随い、半分は天道に逆らう」立場に立つ天人合弁主義者であったのである。天保十一年一月二十二日相模国塔の沢の講話に曰く、「聖語に曰く、『それ仁者は、己れ立たんと欲して、人を立て、己れ達せんと欲して、人を達す』と。みな定まりある道にて、春、種を施して、秋、実のりを収める米麦これなり。五穀のほか、諸作物、何によらず、昔より定まりたる時節に植え付けいたし、手入れも定まれる通り、手抜きなくいたし候えば、熟作に及び、その時節を外して、その上、手抜きこれあり候ては、豊熟いたすこと、かなわず、これ人道を尽さざる故なり。水車の廻ると、同じことにて、半分は天道に従い降り、半分は天道に逆

らい昇るがごとし。すべて半世界にて、一日の日も、明けて暮れて、昼夜にて、一円なり。道も、往きて、戻って一円、車も、昇り、下りて、一車なり。半分は、天道に随い、半分は、逆らい候形なり。田畑を荒すを荒さじと、勤めるが、人道なり。よくよく考え合すべし」(全二十四、602、全三六、1116)。

秘稿上 222 も、この講話に同調して次のごとく説いている。「農業の道は、天に逆らい、墾開し、刈草し、また天に従いて、樹植し生養す。半ばは、天に逆らい、半ばは、天に従う。順逆、相半ばして、もって農業成る、これを水車にたとふ。半ばは、水に入りて、順流に従い、半ばは、水上に出て、逆流に従う。順逆相半ばして、もって水車成る。もし丸に水上に上れば、循環せず。丸に水中に入るも、また然り。農のごとき、草野芒々たる天自然に逆らいて、墾開し耕耘し、春時生育の自然に順いて、樹植莖培し、秋時枯落の自然に順いて、刈穫す。半ばは、天に逆らい、半ばは、天に順いて、もって農業成る、これ、自然の道にして、人道の第一なり。」農業の道は、かくて「順逆相半ばする」とともに、同時に「順逆相須つ」のである。秘稿 222 と呼応する語録134に曰く、「農業は、半ば天に順い、半ば天に逆らい、順逆相須ちて成る、これを水車に譬うこと、然り。半ば、水中に入り、もって順流に随い、半ば水上に出て、もって逆流に従い、順逆相須ちて、もって循環を全くす。もしことごとく水中に入り、ことごとく水上に出でれば、すなわち循環を失う。原野の芒々はすなわち天なり。その天に逆らいて、もってこれを墾くも、草叢の生々するは、すなわち天なり。その天に逆らいて、もってこれを転るも、春生ずるは、すなわち天なり。その天に順いて、もってこれに種えるも、秋に殺すは、すなわち天なり。あにこれ半ば天に順い、半ば天に逆うにあらざや。すなわち天に順いて、播種の時を失わず、その天に逆らいて、もって耘耔を怠らざるは、人の道なり。」かくてまさに「順逆相半ばする」とともに、「順逆相須つ」ことによりて成立するものは、先づ第一に農業の道である。

さらに同じような構造をもって成立するものとして、尊徳は聖人の道としての推譲の道をあげている。



#### 四 推譲としての人道

尊徳によれば、今日・今年勤勞して、その生産した成果をもって、明日・来年の生活に備えることは、すでに自譲と呼ばれるのである。その限り、勤勞もすでに推譲である。尊徳のいわゆる報徳の道を支える三つの柱としての勤儉譲については次のごとく説かれている、「我が道は、勤儉譲の三つにあり。勤とは、衣食住になるべき物品を勤めて産出するにあり。儉とは、産出したる物品を費さざるを云う。譲はこの三つを他に及ぼすを云う。さて譲は種々あり。今年のを来年のために貯うるも、すなわち譲なり。それより子孫に譲ると、親戚朋友に譲ると、郷里に譲ると、国家に譲るなり。その身その身の分限によって、勤め行ふべし。たとい一季半季の雇人といえども、今年のを来年に譲ると、子孫に譲るとの譲りは、必ず勤むべし。この三つは、鼎の足のごとし。一つをも欠くべからず、必らず兼ね行ふべし」(夜残、43)。自分自身のために勤めて、今日・今年を明日・明年のために貯える譲りは、自譲であり、知人・人々・国家のために譲るのは、他譲である。我の根柢を固めるは、自譲であり、我々の根柢を固めるものは、他譲である。

夜話79に曰く、「それ譲は人道なり。今日の物を明日に譲り、今年のを来年に譲るの道を勤めざるは、人にして人にあらず。十銭取って、十銭つかい、廿銭取って廿銭つかい、宵起しの銭をもたぬと云うは、鳥獸の道にして、人道にあらず。鳥獸には、今日の物を明日に譲り、今年のを来年に譲るの道なし。人は然らず、今日の物を明日に譲り、今年のを来年に譲り、その上、子孫に譲り、他に譲るの道あり。雇人となって、給金を取り、その半ばをつかい、その半ばを(将来)向來のために譲り、あるいは田畑を買い、家をたて蔵を立つるは、子孫へ譲るなり。これ世間知らず知らず、人々行ふところ、すなわち譲道なり。されば、一石の者五斗譲るも、出来難きことにはあらざるべし、如何となれば我ための譲りなればなり。この譲りは、教なくして出来やすし。これより上の譲りは、教に依らざれば、出来難し。(他譲)これより上の譲りとは、何ぞ、親戚朋友のために譲るなり、郷里のために譲るなり、

なお出来難きは、国家のために譲るなり云々。」自己自身ならびに自己の子孫のために、今日・今年のを貯え、明日・来年・将来に譲る時間的な自譲の道をこえ、人々・社会・国家に施し譲る空間的な他譲の道に及ぶのが、報徳推譲の道であり、これを「人道の極」(夜、77)とまで称する尊徳は、端的直截に「人に施しただけが徳つくなり」として、次のごとく説いている、見聞記66の後半に曰く、「千石・百石の家株に生れたる者、いずれも自分のはたらきでこしらえたるにあらず、先祖のこしらえたるなり。その先祖をたずねれば、日本開闢よりこのかたの大尺(大金持)というにもあらず。いずれも、先祖は困窮人より出たる人なり。しからば、めいめい親より譲りうけたる分をまもり、千石は五百石にて暮し、百石は五十石にて暮し、余りを施す。これが先祖へ徳を報うという正業なり。右のよういたし候とて、家株の減じ候儀はなく、いつまでもやはり千石は千石、百石は百石でいるなり。人に施しただけが、徳つくなり。しかるを、今の人、有るが上にも、金錢をため、奢りにふけり、世人羨み候ものをもてあそび、ついに先祖より受け得たる家株を亡ぼす罪人なり。」

前節において、先づ農耕勤勞の道は「人道の第一歩」(秘上、222)といわれたが、勤勞によって将来にそなえて貯える自譲の道を超えて他譲の道を全くする推譲の道は、実に「人道の極」とまでいわれるのである。

かくいわれるのも、譲道こそは全き意味で人畜を区別する所以のものであるからである。動物はひたすらに奪うことに終始し譲ることを知らぬ存在である、天保十一年一月の藤曲村仕法書に曰く、「(動物は)大体をうけたるものは、大体にまかせ、小体をうけたるものは、小体にまかせ、角あるものは、角あるにまかせ、牙あるものは、牙にまかせ、その受け得たるところの力量にまかせ、己が口腹を養うのみにして、譲り施すことなき故に、耳目口鼻・手足羽毛にいたるまで、象兼備をなすといえども、その齡い薄情にして、賤しきこと、言語にのべがたし」(全一七、993)。かく動物が奪取一辺倒の畜道に終始するのに対し、人間が推譲主義の人道を造立するところに、人の人たる所以を見とどける尊徳は、夜話177に曰く、「万国とも開闢の初めに、人類

あることなし。幾千歳の後、はじめて人あり、しかして人道あり。それ禽獸は欲する物を見れば、直ちに取りて喰う、取れるだけの物をば憚らず取りて、譲るということを知らず。草木もまた然り、根の張るるだけの地、どこまでも根を張りて憚らず。これ彼が道とするところなり。人にして、かくのごとくなれば、すなわち盜賊なり。人は然らず、米を欲すれば、田を作りて取り、豆腐を欲すれば、錢をやりて取る、禽獸の直ちに取るとは、異なり。それ人道は天道とは異にして、讓道より立つものなり。讓とは、今年のを来年に譲り、親は子のために譲るより成る道なり。天道には、讓道なし。人道は、人の便宜を計りて立てしものなれば、ややともすれば、奪心を生ず。鳥獸は、誤っても、讓心の生ずることなし。これ人畜の別なり。田畑は、一年耕さざれば、<sup>(荒地)</sup>荒蕪となる。荒蕪地は、百年経るも、自然田畑となることなきに同じ。人道は、自然にあらざ、作為のものなるが故に、<sup>(人間が用いる)</sup>人倫用弁するところの物品は、作りたる物にあらざるなし。故に、人道は作ることを勤むるを善とし、破ることを悪とす。百事自然に任すれば、みな廢る。これを廢れぬように勤むるを、人道とす。人の用うる衣服の類、家屋に用うる四角なる柱、薄き板の類、その他、白米・搗麦・味噌・醤油の類、自然に田畑山林に生育せんや。よって人道は、勤めて作るを尊び、自然に任せて廢るを惡む。それ虎豹のごときは、<sup>(もちろん)</sup>論なし、熊猪のごとき、木を倒し、根をうがち、強きこと、言うべからず。その労力もまた云うべからず。しかして終身勞して、安堵の地を得ること能わざるは、讓ることを知らず、生涯己がためのみなるが故に、勞して功なきなり。たとえ人といえども、讓の道を知らず、勤めざれば、安堵の地を得ざること、禽獸に同じ。よって人たる者は、智恵はなくとも、力は弱くとも、今年のを来年に譲り、子孫に譲り、他に譲る道を知りて、よく行わば、その功、必ず成るべし。その上に、また恩に報うの心がけあり。これまた知らずば、あるべからず、勤めずば、あるべからざるの道なり。」

「体にせがまれて」生ずる人心(秘上、67)、または「形体に発して、人欲に出づる」人心(語、39)よりして、我が身中心の我欲に駆られるとき、

人は陰陽・昼夜・自他等の対偶一円性の天道という自己の根柢から疎外し、陽陽・昼昼・自自というような自己中心的驕慢そのものの「人体より出たる僻道」(夜、114)よりして、讓道どころか、奪道にはしり、報徳訓は一字一句調べても、報徳行の実はない人物のごとく、「日々報ゆるの心なき者、人にして人にあらざるべし」といわれるところ、「現在畜道」(全二四、600)なのである。それに対して、「体を離れて空より出づる心」としての道心よりして、陰陽・昼夜・自他等の対偶の一円性の天道に即して、陰陽陰陽・右足一步、左足一步と日月と俱に輪廻し、自ら勤めて来年に譲るとともに、他にも譲る讓道に生きてこそ、「現在人道」なのである。

嘉永五年7月、66才の尊徳は福住正兄の家の温泉に共に入浴した福住の兄大沢精一に次のように分度推讓の道を説くにあたり、人間の手のしくみが奪一辺倒の動物の牙・角と異って讓に都合よく出来ている旨を述べている、夜話38に曰く、「それ世の中、汝等のごとき富者にして、みな足ることを知らず、飽くまで利を食ひ、不足を唱うるは、大人のこの湯船の中に立ちて、かがまずして、湯を肩にかけて、湯船ははなはだ浅し、膝にだも満たず」と、罵るがごとし。もし湯をして望<sup>(彼等の望)</sup>にまかせば、小人童子のごときは、入浴すること能わざるべし。これ湯船の浅きにはあらずして、己がかがまざるの過なり。よくこの過を知りてかがまば、湯たちまち肩に満ちて、おのずから十分ならん。何ぞ他に求むることをせん。世間富者の不足を唱うる、何ぞこれに異らん。それ分限を守らざれば、千万石といえども、不足なり。一度過分の誤を悟りて、分度を守らば、有余おのずからありて、人を救うに余りあらん。それ湯船は、大人はかがんで肩につき、小人は立って肩につくを中庸とす。百石の者は、五十石にかがんで、五十石の有余を譲り、千石の者は、五百石にかがんで、五百石の有余を譲る、これを中庸というべし。もし一郷のうち、一人、この理を踏む者あらば、人々みな分を越ゆるの誤を悟らん。人々みなこの誤を悟り、分度を守りて、克く譲らば、一郷富榮にして、和順ならんこと、疑なし。古語に『一家仁にして、一國仁に興る』といえり、よく思ふべきことなり。それ仁は人道の極なり。儒者の説、はなはだむずかしく

して、用をなさず。近く鬻うれば、この湯船の湯のごとし。これを手にて己の方に搔けば、湯、我が方へ来るがごとくなれども、みな向うの方へ流れかえるなり。これを向うの方に押すときは、湯、向うの方へ行くがごとくなれども、また我が方へ流れ帰る。少しく押せば、少しく帰り、強く押せば、強く帰る。これ天理なり。それ仁と云い、義と云うは、向うへ押すときの名なり。我が方へ搔くときは、不仁となり、不義となる、慎しまざるべけんや。  
(論語顔淵篇)  
 古語に『己に克つて、礼に復れば、天下仁に帰す。仁を為すは、己に由る、人に由らんや』(孔子の言葉)とあり。己とは、手の我が方に向くときの名なり。礼とは、我が手を先の方に向くときの名なり。我が方へ向けては、仁を説くも、義を演ぶるも、みな無益なり、よく思うべし。それ人体の組み立てを見よ。人の手は、我が方へ向きて、我がために<sup>(便利)</sup>弁利にできたれども、また向うの方へも向き、向うへ押すべく出来たり。これ人道の元なり。鳥獣の手は、これに反して、ただ我が方へ向きて、我に弁利なるのみ。されば人たる者は、他の為に押すの道あり。しかるを、我が身の方に手を向け、我がために取る事のみを勤めて、先の方に手を向けて、他のために押すことを忘るは、人にして人にあらず。すなわち禽獣なり、あに恥づかしからざらんや。ただ恥づかしきのみならず、天理に違うが故に、ついに滅亡す。故に我れ常に『奪うに益なく、讓るに益あり、讓るに益あり、奪うに益なし、これすなわち天理なり』と教う、よくよく玩味すべし。」かくして我が手を向うに向けて湯を押しやり、身を低うして湯を浴びさせることにたとえられる仁讓の道は、実に「人道の元」と称せられるのであるが、秘稿下125もまた次のごとく説くのである、「一村の富家たる者、不足を称せば、小前立ち難し。たとえば湯屋のごとき、大人入りて、湯の肩にとどかざるを憂いて、汲みかくなれば、湯を費すのみ。また肩につくまで、湯を多くするときは、大勢入れば、湯あまり、また子供は入ること能わず。故に、大人がかがんで肩につくをもって、大勢入り、子供入りて、平等に楽しむ。この理を明弁し、一村の大家たる者、かがんで、百石ならば、五十石に屈すれば、その余沢、小前一同に及びて、貧富平等に助かる。湯屋と同一なり。」風呂や温泉を好ん

だ尊徳は、ここでも浴湯にたとえをとり、とくに富者に対して痛烈に讓道の重大性を説いているのである。かくのごとく、讓道を「人道の極」として力説する尊徳は弘化元年の「農家大道鏡」においても、「それ人、飢えて食し、<sup>(若)</sup>渴して飲み、寒えて衣る、これより先なるはなし、古の郷村のごとく取り直し、民命を安んぜんと欲する者は、先づ荒田を発す、荒田を發せんと欲する者は、先づその分内を讓る」(全一、902)と説くのである。

かくして「人道の極」とまで称せられる推讓の道は、農耕勤勞の道とともに、天道自然の道ではなくして、聖人によって創立せられた人道、すなわち「聖人の道」といわれるのである。夜話42と呼応する秘稿上165に曰く、「天地の道と父子の道と夫婦の道とは、天性自然なり。聖人の道と農業の道とは、人造にして、自然の道にあらず。それ自然の道は、鳥獸虫魚、およそ生くる者、みな食を求めて、讓ることなく、ようやく鳥獸の類、親子共に食するのみ。草木に至りては、眼前松の根に生ずる松苗は、己が子なれども、己が根のとどくだけ、水を奪い、己が枝葉の届くだけは雨露を吸い、少しも讓ることなし。これすなわち、天道の自然、古より今にいたりて、親子・兄弟・朋友の親しみなし。故に聖人はじめて出でて、讓るの道を興し、これを人道となすなり。人といえども、道なければ、何ぞこれと別たんや。故に、人心奪う心を生ずるは、たとえば山野に草木の生ずるのごとし。それ山野に草木の生ずるを起し返して、米麦をつくる、これは、農業の道と云う。奪を變じて讓ることをなす。これを人道という、ともに、天道を背くなり。たとえば、水車のごとし。それ車は半分は水に随い、半分は水に逆らう形なり。聖人の道というは、かくのごとし。あるいは、一度は天道に随い、一度は天道に逆らう。農業の道も、また然り。天道に背きて、田畑を起し、天道に随って、蒔き仕付くるなり。」かくして、聖人推讓の道もまた、農耕勤勞の道と同様に、半ば水流に随い、半ば水流に逆らう水車とひとしく、半ば天道に随うとともに、半ば天道に逆らう「順逆相須つ」相反相即的天人関係において成立するのである。かくして、天道自然に半ば逆らう聖人推讓の道については、「天道を逆に堰きたる道」として、次のごとく云われている、教林25に曰

く、「寒中に水(提供する)をふるまうは、不仁なり、暖の物をふるまうが、仁なり。暑中は、冷き物をふるまうが、仁なり。聖人の道は天道を逆に堰きたる道なれば、寒きときは、あたたかき物、暑きときは、つめたき物ふるまうは、仁の道なり。」実に「天道を逆に堰きたる道」が聖人が天道自然の畜道・奪道を否定して立てた仁の人道である。

語録330に曰く、「古人、仁字を製するに、けだし深意あり、右(右のつくり)の二画は、すなわち、これ天地なり。天地の間に生ずるもの、人類鳥獸虫魚草木、みな、これを二間と謂う、すなわち人間(じんげん)なり。二画を斜めに合すれば、人の字となる。人の字二画の間にあるは、すなわち天人地なり。鳥獸虫魚草木、相奪(生活し)って活をなし、暫くも安んずるを得ず。人類もまたかくのごとし。神聖これをあわれみ、讓道を立て、鳥獸と類を分つ。何を讓道と謂うや。吾が分内(出し)を推し、もって人に譲るなり。すなわち、二画の間の人の字を取り、左(左のへん)となし、もって仁字を製す。これ吾が身を推し、これを天地の外に居(す)くなり。すなわち舜禹、天下を有ちて、しかも与(よ)からざるなり。」見聞記64も、同じく仁の字について、次のごとく言及している、「仁という字は、(天照大神)大神宮、田畑を開き、諸民に(かたはし)(左へよせて)与え給う。これ仁の字の根元なり。すなわち、片はじ讓(にんべん-い)つて、人という字を書き、また片はじ讓り、二の字を書き、すなわち仁の字となる。相互に譲りあいたきもの、これ人道なり。讓るといふ心なければ、鳥けだものと同じことなり。」すなわち推讓の道は神聖にはじまる仁の道である。

かくして、「半ばは、天に逆らい、半ばは、天に順う」という「順逆相須つ」構造において、「天道に順いつつ、違ふところ」ある人道として成立するものが、農耕労働の道であり、また聖人推讓の道なのであるが、尊徳によれば、その両者は、我が国においては、共に天照大神によって開頭創立せられたのである。秘稿下344に曰く、「それ天地の間に体を現し生々するもの、有情の鳥獸虫魚(もちろん)は論なし、無情の草木に至るまで、終日終夜、食を求め、相共に相争うて、止まず。父子兄弟といえども、讓ることなし。蛇の蛙における、猫の鼠における、はなはだ悪むべきがごとし。然りといえども、これ天性の自然、かくのごとくせざれば、性を全うすること能わざる故なり。人倫(人間社会)

といえども、茫々たる太古、神聖未だ出でたまわず、人道未だ立たざる前、何ぞこれに異ならんや。天照大神、天降らせたまい、己を推して人に譲り、相助け相養うの道を立てさせたまいてより、鋤を作りて耕し、鎌を作りて刈り取り、宮室を作りて風雨雪霜をささえ、衣服を製して寒暑を凌ぎ、鍋釜を作りて火食し、府庫を作りて蓄積をなし、それよりして相続き、代々の神聖出でさせたまい、万事万物備わることなきこと、かくのごとく、今日に至る、実に極楽浄土というべし。これただ一の讓より発し来るなり。しかるに禽獸の道、太古より数千万歳相続きて、絶えず、しかりといえども、今日に至りて、明日のために、食を蓄うることだも能わず。これ何ぞとなれば、讓の一字を知らざればなり。故に、父子ありといえども、父子の道なく、夫婦ありといえども、夫婦の道なく、兄弟ありといえども、兄弟の道なく、朋友ありといえども、朋友の道なし、また君臣の道なし。故に疾病老幼相助けず、常に力をもって相凌ぎ、病ある者は病みて死し、老ゆる者は老いて窮し、強き者は常に伸び、弱き者は常に屈す。これを人倫に見ば、誰かよく忍びんや。みな奪を知りて、讓を知らず、相生養するの道なければなり。それ、人はこれと異なり。大神以来、讓道を立て、今日は明日のために譲り、今月は来月のために譲り、今年は今後のために譲り、前代は後代のために譲り、後世はまた後世のために譲り、世界相続をなす。たとえば、去年の米穀を食して、来年の米穀を作るがごとく、受けては、譲り、受けては、譲り、もって人道立つ。このごとく、讓をもって相続する世界に生じ、讓をもって立つる人道に交わり、前聖の恩沢に浴して、衣食住を豊かにし、妻子を私し、しかして讓を知らざる者、何ぞ禽獸と分かつたん。いわゆる国賊なるものか。故に予つねに曰く、『人にして讓を知らざる者は、家を出て空居すべし、衣服を捨て裸にて居るべし、火食すべからず、五穀を食すべからず、道を行くべからず、橋を渡るべからず、凡そ人道作為のもの、みな用うべからず』と。如何となれば、人道もと讓に開け、讓に成り、世々代々譲り譲りて、今かくのごとくなればなり。もし前世は後世のためにせず、後世は未来のためにせず、父兄は子弟を育せず、才は不才を養わず、能は不能を憐れま

ず、知者は愚者を教えず、貴は賤者を撫でずば、人道ここに絶えん。<sup>(徳川家康)</sup>東照神君曰く、『天恩を受けて、地に施せ。親恩を受けて、子に施せ、仏恩を受けて、僧に施せ』と。按ずるに、貝原翁曰く、『本邦の俗、政事をもつて<sup>(しておく)</sup>仕置き<sup>(益軒)</sup>という。前代の初聖、後世のために仕置き、当代の人、また未来世のために仕置くを云うなるべし』と。思い合わすべし。」ここで、尊徳が天照大神・徳川家康・貝原益軒の三者をあげても、荻生徂徠を問題にしていないことは、注目に値するが、実に尊徳が田所八郎平に語った語によれば、「推譲は徳の司、善の主なり、悪の第一は掠奪なり」(「留岡幸助」日記Ⅱ、639)とあるのである。

#### (四) 分度(儉)としての人道

勤にして自譲、譲にして他譲、その間を橋渡しするものが、各自の天分に即して、勤め、その成果を「自然の中」としての分度に即して譲る「儉」の徳である。儉は勤・譲の二道を循環滞りなく媒介成立させる潤滑油の役割をなす徳である。すなわち人道としての勤労にいそしむのも、一方では自己及び子孫の将来にそなえて譲る自譲のためであるとともに、他方では人々のために譲る他譲のためである。ただ勤儉貯蓄のみを事として畜道奪道に墮する強慾鄙吝の高利貸的存在は、人面獣心の徒で、やがては没落の運命を免るべくもないのである。「天録増減鏡」に、「勤めて勤むべし、身を苦めて財を施せば、その身その身天命を受く」(全一、616)とある所以である。まさに勤労としての人道に励むのは、推譲としての人道を全くせんがためである。有欲にして個人的に勤労するは、何等かの意味で、無欲にして社会的に推譲せんがためである。夜話3に「欲に随いて家業を励み、欲を制して義務を思ふべきなり」と端的に説かれる所以である。

かく勤労が推譲につながるとともに、逆に推譲は勤労によりて条件付けられねばならないのである。すなわち身を苦しめ勤労した成果を譲らなければ、その推譲はよき実を結ばぬのである。すなわち、「もし譲り受けて助かる者ありといえども、譲り与える根元なきときは、譲をうけたるにあらず、

奪いたるに同じ」(全一、632)と「天録増減鏡」に説かれるがごとくである。真に身を苦しめて勤労した成果を譲りてこそ、その推譲は実を結び、「恵みて費えず」という有終の美をなすのである。

かくて勤の人道と譲の人道が相互に生かし合うように相互媒介の橋渡しをするものが、分度(儉)としての人道である。すなわち「天命自然の分度」を守りて、勤譲相俟つ道を全くするとき、人は天人合一的にその徳を全くしその財を保ち得るのである。語録126に曰く、「人に貧富あるは、なお天に陰陽あるがごとし。陰極れば、すなわち陽生じ、陽極れば、すなわち陰生ず。貧極れば、すなわち富生じ、富極れば、すなわち貧生ず。陰陽・貧富の循環やまざるは、天の道なり。自ら強めて富を保つは、人の道なり。何をか道という、分度これなり。分を立て度を守れば、すなわちその徳、極りなし。極りなきの富をもって、人を濟わば、すなわち上に天命に配し、下に人心に合す。富を保つ道、あにこれに過ぎるものあらんや。」まさに「自然の中」としての分度は、「上、天命に配し、下、人心に合する」ものである。

そこから語録127もまた次のごとく説くのである、「人に貧富あるは、あに偶然ならんや、必ず由って来る所あり。それ財は、儉に聚り、奢に散ず。<sup>(集)</sup>けだし<sup>(百兩)</sup>百金<sup>(百兩)</sup>の入をもって、百金の出をなす者は、貧ならず、富ならず。百金<sup>(百兩)</sup>の入をもって、八十金<sup>(百兩)</sup>の出をなす者は、財聚りて富む。百金<sup>(百兩)</sup>の入をもって、百二十金<sup>(百兩)</sup>の出をなす者は、財散じて貧し。しからば貧富の本は、<sup>(支出)</sup>出財分外<sup>(分度以上)</sup>に進む<sup>(分度以下)</sup>と分内に退くとの二途にあるのみ。分内に退く者は、天に合す、故に事を為すに、必ず成り、富優自ら至る。分外に進む者は、天に背く。故に事を為すに、必ず敗れ、貧困自ら至る。貧富あに偶然ならんや。」「天録増減鏡」もまた「恐れて恐るべし。財を貪り身を楽しみ、その家を富して、もつてその用を奢れば、年ごとにその分内の徳を減ず」(全一、624)とも、「勤めて勤むべし。身を苦しめて財を施し、その家を貧して、もつてその用を約せば、年ごとにその分外の徳を増す」(同上)とも説かれるとともに、「その身に随い、その福禄を有つや、恐れて恐るべし、身を楽しみ徳を棄てば、年ごとにその分内の福を減ず」(全一、629)とも、「その身に随い、その福禄を

有つや、勤めて勤むべし、身を苦しめて徳に報いれば、年ごとにその分外の福を増す」(同上)とも説かれるのである。

かくて陰陽・貧富循環免れがたき天道自然の理に対して、よく天命自然の分度を立て、永く天禄を保つものは、「聖人の立てたまう人道」である、秘稿上231は、上にあげた語録126と相呼応して、次のごとく説いている、「貧極きわまれば、すなわち富を生じ、富極きわまれば、また貧に入る。貧富往来、なお四時の循環するがごとし。驕儉・勤惰またこれに従う。貧極きわまれば、奢を欲しても、財なく、怠を欲しても、飢寒ここに迫る。故にたの自から勤儉の心を生ず。いやしくも勤儉すれば、衣食を産す。なお勤儉もって止まざれば、ついに富に至る。富極きわまれば、勤儉亡びて、驕奢自から生ず。何となれば、富優に生れて、勤儉の道を知らず。ただ為すところ、公務のために、衣服武器を調す、家を繕補す、門戸を飾る、その為すところ、ことごとく驕・奢の二に過ぎず、祖先の家を興す(は)、勤儉にあることを思う者は、ほとんど少し。まして「我が富を得るは、祖先の恩徳による、百石ならば、八十石に儉し、二十石を国のために譲らん」とするの念におけるをや。ついに驕怠のために家を亡ぼすことを知らず。また貧に陥る。これ貧富循環免れざる自然の理なり。それ人世は人作の道をもって成る。天理に委すれば、人道ここに滅す。人世、居室に安んじ、飢寒を憂いざるものは、聖人のたてたまう人道によるが故なり。然らば、何ぞ、貧富循環天理に委して、人道を制せざるべけんや。それ永世保富の道は、(分度)分題を極むるにあり。分題を極むるの道は、富にいたるの至道、人世一日も欠くべからず。故に天命自然の分度を立つ。たとえば、百石の家ならば、八十石に分度を立て、もって二十石の度外をもって譲らば、何をなして成らざらん。その積(つもりもって)、また計るべからず。この法を固く立て家道を制するときは、貧何によって生ぜん。これ富を保つの大道理なり。」すなわち、ここでも陰陽・貧富の循環という天道自然に委せずして、「半ば逆らい、」人為をもって分度を立て守るのであるが、その分度は実に「天命自然の分度」である限り、それは天道自然に「半ば順う」のである。かくして分度格守としての人道も、農耕勤勞としての人道と推譲としての人道との

両者とひとしく、「半ば天道に逆らい、半ば天道に従う」順逆相須つ天人一貫の道にほかならない。かかる分度(儉)の道こそは、勤の道と譲の道を媒介して、よく勤儉譲の三徳の三位一体性を成立せしめる。かくしてここに勤儉譲の三一的報徳体系が成立するのである。

#### (六) 勤儉譲帰一の報徳道

かくのごとくして、勤儉譲の三徳は、相互に相俟ち彼此相濟し、報徳道を一円統一にもたらすのである。「我が道は、勤儉譲の三つにあり」(夜残43)とも、「世上一般、貧富苦楽と云い、さわげども、世上は大海のごとくなれば、是非なし。ただ水を泳ぐ術の上手と下手とのみ。舟をもって(用をたす)水も、溺死する水も、水にかわりはあらず。時によりて、風に、順風あり、逆風あり、海の荒き時あり、穏かなる時あるのみ、されば溺死を免がるは、泳ぎの術一つなり。世の海を穏かに渡る術は、勤と儉と譲の三つのみ」(夜、159)とも説かれるのであるが、勤勞と推譲とは分度の道を介して相互に媒介せられて、全き一円循環行道を現成するのである。すなわち欲を起して勤勞するとともに、その天道自然の分度を知り、欲を制して推譲するのであるが、さらにまた推譲の元を確保するために、欲を起して勤勞し、重ねて欲を制して推譲するところ、有欲の勤勞と無欲の推譲とは、自然の中をしての分度を上下の両極とする昇降循環不止不転の報徳一円行道を無限におしすすめるのである。ここに天道自然の行道が、色即是空・空即是色にして「有常、有常にあらず、無常、無常にあらず」といわれて、有無の相反相即性の間に不止不転の一円行道をなすごとく、「天道と人道と半々なり」といわれる勤儉譲の三位一体的一円行道も「有欲、有欲にあらず、無欲、無欲にあらず」といわれる有無相即の一円行道をなし、有欲の勤勞と無欲の推譲とは相互に動機付け活かし合うのである。そこでも、「天道と人道、半々なり」という理を説く尊徳は、その譬を水車にとるのである。夜話3に曰く、「それ、人道は、たとえば、水車のごとし。その形、半分は水流に順い、半分は水流に逆うて、輪廻(すっきり)す。丸に水中に入れば、廻らずして、流るべし。また水を離る

れば、廻ることあるべからず。それ仏家にいわゆる知識のごとく、世を離れ欲を捨てたるは、たとえば、水車の水を離れたるがごとし。また凡俗の教義も聞かず、義務も知らず、私欲一偏に著するは、水車を丸に水中に沈めたるがごとし。共に、社会の用をなさず。故に、人道は中庸を尊む。水車の中庸は、よろしきほどに水中に入りて、半分は水に順い、半分は流水に逆のぼりて、運転滞らざるにあり。人の道も、そのごとく、天理に順いて、種を蒔き、天理に逆うて、草を取り、欲に随いて、家業を励み、欲を制して、義務を思ふべきなり。欲に随いて利潤追求のみに励む有欲一辺倒の自由主義的資本主義経済も、欲を制して公共的義務のみを強いる統制主義的共産主義経済も、ともにその限界が自覚せられるに至った今日、この報徳経済倫理の示唆するところは、些少ではないであろう。

身体をもつ人間として、自他の身体を養い保つ衣食住にかかわる営みも一日も廃し得ぬ以上、「欲に随いて、家業に励む」有欲の勤労は、(初発的)人道であるが、それが「私欲一偏に著す私道」という畜道の天道疎外性を超えるために、「欲を制して、義務を思い」無欲の推譲の道につくとき、「有欲、有欲にあらず」であるとともに、さらにその推譲の資源を確保して、自他の生活を全くするためには、また「欲に随いて、家業に励む」とき、「無欲、無欲にあらず」であるところ、有欲の半車水中に降りて水流の方向に逆らう人道と無欲の半車水上に上りて、水流の方向に順う天道と「半々」にして順逆相須ち、天道人道相和して「自然の中」に住する「中庸の徳」が天人合一的に成立し、ここに勤儉譲一貫、人にして天に帰る報徳溯源道が「自ら行い、その功德を譲り施す」神儒仏帰一の大道として成立するのである。尊徳がその全心血を濃いだ桜町仕法の土台帳の一節に曰く、「古しえ天地開闢より今日に至るまで相開け、家ごと銘々安穩無事に相続まかりあり候神國の大道にもとづき取り行い、書に曰く『古ニシタガイ糶ルハ、帝堯ナリ、曰ク、放勲欽明、文思安々、マコトニ恭シク克ク譲ル、四表ニ光被シ、上下ニ格ル、克ク俊徳ヲ明ラカニシ、モツテ九族ヲ親シム、九族スデニ睦ジク、百姓ヲ平平におさめる)章ス、百姓昭明、万邦ヲ協和ス、黎民アア変リ、時雍グ』と宣えり。経ニ曰

経文段分)く、『願クハコノ功德ヲモツテ、平等ニ一切ニ施シ、同ジク菩提心ヲ発シ、安楽國ニ往生セン』と宣えり。神儒仏の三道、いづれも、自ら行い、その功德を譲り施すのほかこれなき旨治定いたし、無尽倉積と名付く云々)全十、808)。

### (七) 三教帰一説

実に「自ら行い、その功德を譲り施す」勤儉譲の三位一体的一円行道は、また「神儒仏の三道」帰一の道である。天保十一年一月二十二日塔の沢の講話の末尾に曰く、「神書にいわゆる六根清浄、仏經に曰く、即心成仏、聖に曰く、『吾が道は一もって貫く。』神儒仏の教、みな一旨なり」(全二十四、603)。かく三教帰一の普遍的地平の場に立つ尊徳は、先づ秘稿下184において曰く、「わが道は、神は何をもって益とし、何をもって短とす、儒は何をもって長とし、何をもって短とす、仏は何をもって益とし、何をもって短とす、その理を悉く究めて、もって神儒仏三昧を合して、もって一粒丸となし、この道を立つ。或る人、問いて曰く、『丸散丹円、各分量あり、三昧の分量如何。』曰く『神を二さじ盛る、天朝は上国なり。』さらに語録25に曰く、「吾れ我が法を創設するや、神、何を道となし、何に長、何に短、儒、何を要となし、何に益、何に損、仏、何を主となし、何に得、何に失と、各々その理を窮め、三教を合して興国安民の一大法となすこと、なお藥劑の三昧を合して一粒丸となすがごとし。国家の衰廢の疾を患うる者、これを服用せば、愈ざるなし。いわゆる上医は國を医する者なり。曰く、『藥劑は各分量あり、如何。』皇國は本なり、異邦は末なり。故に神は二七を用い、儒仏は各一七を用う」。

夜話 231 は「神儒仏正味一粒丸」について委曲をつくして次のごとく説いている、「予、久しく考えて、神道は何を道とし、何に長じ、何に短なり、儒道は何を教とし、何に長じ、何に短なり、仏教は何を宗とし、何に長じ、何に短なりと考うるに、みな相互に長短あり、予が歌に、

世の中は捨て足代木の丈くらべ

それこれともに長し短し

と云いしは、慨歎にたえねばなり。よって今道々の専らとするところを云わば、神道は開国の道なり。儒学は治国の道なり。仏教は治心の道なり。故に、予は高尚を尊ばず、卑近を厭わず、この三道の正味のみを取れり。正味とは、人界に<sup>(大切)</sup>切用なるを云う。切用なるを取りて、切用ならぬを捨て、人界無上の教を立つ。これを報徳教と云う。戯れに名付けて、神儒仏正味一粒丸という。その功能の広大なること、あげて数うべからず。……衣笠兵太夫、神儒仏三味の分量を問う。翁曰く、『神<sup>きじ</sup>一七、儒仏半七づつなり。』ある人、傍にあり、これを図にして、『三味分量<sup>(神儒仏)</sup>、このごときか』と問う、翁一笑して曰く、『世間、この奇せ物のごとき丸薬あらんや。すでに丸薬といえは、よく混和して、さらに何物とも分らざるなり。このごとくならざれば、口中に入って舌に障り、腹中に入って<sup>はらみ</sup>腹合悪し、よくよく混和して、何品とも分らざるを要するなり呵々。』さらに夜話124の末尾に曰く、「神と云い、儒と云い、仏と云うも、本来は一なり。一の水を<sup>(元の水)</sup>酒屋にては酒と云い、酢屋にては、酢と云うがごとき違いのみ」とあり、夜話8の冒頭に「世の中に誠の大道はただ一筋なり。神といい、儒といい、仏という、みな同じく大道に入るべき入口の名なり」とあるが、三教帰一の「神儒仏正味一粒丸」としての報徳教の哲学的根柢は「世界万般、みな同じく一理なり」(夜、69)とも、「天地は一物なれば、日も月も一つなり、されば至道二つあらず、至理は万国同じかるべし」(夜、229)とも、いわれる万物一体・万理帰一説である。かかる立場に立つ報徳教は、有欲にして半ば水中に沈みて勤勞し、無欲にして半ば空中に出で推譲する水車として、陰と陽、一上一下と相反相即的に、よりをかける方向とよりをもどす方向とが交互にとられ、半ば天道に背きて人道に励み、半ば天道に順いて人道を全くする天人相即の不止不転的行道をなすのであるが、この点を立ち入ってその構造を究極的に究明するために、われわれは天道と人道との関係を総括的に吟味し、その関係は、その何れかが一方的に他を支配する機械的なものではなく、その両者が相互交徹的な力動的関係であることを見届けるであろう。

## 2 中篇 天道と人道との相関関係

### (一) 天命の伸縮・年切り論

二宮尊徳の哲学的思想の中心問題は、人々がつとに注目しているごとく、天道と人道との関係である。一方的に天道の絶対支配性が力説された権威主義的な封建体制の時代に、天道に対立する人為作の人道を説いたところに、二宮尊徳の近代的意味があるとする見解は、俗流歴史家などが事新しくその創見を誇るかのごとく述べたるところである。たしかに尊徳は明確に天道と人道とを区別し、天道に対立する人道を説いているのであるが、その際には必ず「半ば天道に順い、半ば天道に逆らう」という条件的天道対立的人道を説くのみならず、しかも明確に「順逆相須つ」ことを説いているのである。すでに引用したごとく、語録134が次のごとく説いていることは、尊徳の天道人道論の本質と核心を衝いて余すところがないのである、「農業は、半ば天に順い、半ば天に逆らい、順逆相須ちて成る、これを水車にたとうる<sup>(びったりする)</sup>に然り。半ば水中に入り、もって水中に入り、順流に随い、半ば水上に出て、もって逆流に従い、順逆相須ち、もって循環を全くす。もしことごとく水中に入り、ことごとく水上に出れば、すなわち<sup>(まわらなくなる)</sup>循環を失う云々。」「半ば天道に順い、半ば天道に逆らい、順逆相須ち」、よく不止不転の天道は天人一貫に循環して、その自然の理を易えないのである。その際、半ば天道に背く人道なるものは、所詮天道自体の法則そのものに即して、その速度を調整し、その軌道を修正するのであって、天道自体の法則は不易不変なのである。後に見るごとく、天道が水に、人道が魚にたとえられる所以である。

人道の主体的操作によって、不止不転の天道の歯車の必然的進行に「半ば背き」、それを或る程度調整して「半ば順い」つつ、「順逆相須つ」典型的なものが、尊徳のいわゆる天命伸縮なのである。夜話29に曰く、「今日はすなわち冬至なり、夜の長さ、すなわち天命なり。夜の長きを憂いて、短くせん<sup>ちたん</sup>と欲すといえども、如何ともすべなし。これを天という。しかしてこの行燈



の皿に、油の一杯ある、これもまた天命なり。この一皿の油、この夜の長きを照すに足らず、これまた如何ともすべからず、ともに天命なれども、人事をもつて、灯心を細くするときは、夜半にして消ゆべき灯も腕に達すべし。これ人事の尽さざるべからざる所以なり。……それこの世界は自転運動の世界なれば、決して一所に止まらず、人事の勤惰によって、天命も伸縮すべし云々。」

このように、いわゆる天命としての天道自然の運行に人道が割り込んで、天道自然の法則自体は寸毫も変更されるところはないから、「半ば天道に順い、半ば天道に逆らい」つつ、「順逆相須つ」とも、「天行の健なるに法り、自ら強めて息まず」とも、「天道に違うにあらず、天道に順いつつ、違うところある道理」とも、「天理に随うといえども、また人為をもって行いを人道と云う」とも、「天道にたがうといえども、天またこれを助く」とも云われるのである。そこから尊徳は身体生命維持の必要性から天道に対立する人道を力説しながらも、つねにまた驕慢不逞天を畏れぬ立場をきびしく批判して「満ちて溢れず、高くして危からざる」人道を説き、「上、天命に配し、下、人心に合する」天人一貫の報徳道に生きぬいたのである。

この点で、天命伸縮的人道を説く尊徳は、百尺杆頭一步を進めて「年切り」克服説を次のように淡々として且つ平明に説いているのである、「儒に循環と云い、仏に輪廻転生と云う、すなわち天理なり。循環とは、春は秋になり、暑は寒になり、盛は衰に移り、富は貧に移るを云う。輪転と云うも、また同じ。しかして仏道は、輪転を脱して、安楽国に往生せんことを願い、儒は、天を畏れ、天に事えて、泰山の安きを願うなり。予が教うるところは、貧を富にし、衰を盛にし、しかして循環輪転を脱して、富盛の地に任せしむるの道なり。それ菓木、今年大いに実れば、翌年は必ず実らざるものなり。これを世に年切りと云う。これ循環輪転の理にして、然るなり。これを人為をもって年切りなしに、毎年ならするには、枝を伐りすかし、またつぼみの時、つみとりて、花を減し、数度肥を用うれば、年切りなくして、毎年同様に実るものなり。人の身代に盛衰貧富あるは、すなわち年切りなり。親は勉強なれど、子は遊惰とか、親は節儉なれど、子は驕奢とか、二代三代と

続かざるは、いわゆる年切りにして、循環輪転なり。この年切りなからんことを願わば、菓木の法に倣いて、予が推譲の道を勤むべし」(夜話、153)。

この際、とくに尊徳にとっては、上掲の文にあるように、「二代三代と続かざる」家々の浮沈盛衰は、いたるところ目撃した切実な問題であっただけに、次のように語っている、「中庸(28章)に曰く『愚にして自ら用いることを好み、卑にして自ら専らにすることを好み、今の世に生れて、古の道に反える』と。わざわざ必らずその身に及ぶを云う。今、子として父親の業を卑しめ、その営(家業)とを換(かえる)う、これ亡びの兆なり。たとえば、一日の中、日昇り、東方にあり。午(正午)にいたるまで、東方を照す。午過ぐれば、西方より照らす。父、艱苦勤動して、その家を富ますは、一日のうち、朝より日の登るがごとし。子、富家に生るるは、午後の日、西にあるがごとく、艱難勤苦を知らず。己が居所のちがいを知らずして、父東方より照らすと、言いはし、如何なることぞや。日は西方より照すと(きめて)、故に父の業および家器に至るまで、悪しと思うて、その業を変え、驕奢(災が)になりて、富家となりし道を廃す。このごとき故に、貧に陥る。古語に曰く、『父、糟糠(親は苦勞し)に生れ、子、背梁(子は業をし)に飽き、孫、遺糧(孫は乞食をする)を拾う』と。また宣ならずや」(秘下、262)。すなわち海保青陵とともに、当時の封建社会において、いたるところ親子孫三代にわたるブッデンブロー克斯的浮沈の悲喜劇を見とどけた二宮尊徳は、このような年切り克服の道を説かざるを得なかったのであるが、その根柢をなすものは、「天行の健(つと)に法り、自ら強めて息まぬ」人道観である。

この点で参照すべきものは、秘稿上40であろう。曰く、「御仕法初年の頃、東郷に六右衛門という者あり。農業出精にて、御褒美なども数度頂戴いたせし。しかしながら、惰風(一般が)の中、出精いたすくらい故、悪賢(ぼくち場)あまいたこく、突場の商などまで致し、かなり暮し居り候えども、自然悪取種り込み候故か、その者ども死し、その子敢えて悪きにあらずして、ついに家に居ることならずして、今行方を知らず。その次男も至極実体の者故に、新家作(家屋)ならびに米10俵・麦十俵・稗十俵遣わし、取り立て候えども、また同じく行方を知らずになりぬ。これらの実理をよくよく見るときは、不義の富貴浮雲のごとき聖語、弁

を待たずして、明らかなり。然りといえども、冥々たる大空、誰かそれ<sup>つかさ</sup>りて、その裁断をなすや、然る所以の理は知るべからず。これを知るは、ただ耕作の道にあり。それ広々たる平野の中、種を施して、土をおおい、肥を入れて、土をおおうと、一粒は一粒、二粒は二粒、百粒は百粒、また肥多きは、多きだけ栄え、少きは少きだけ栄ゆ。これ、女子供といえども、知るところなり。しかりといえども、一年何程肥を多く入ればとて、永年実りの増すにあらず。その余沢、一兩年にして、断つべし。その断つ所以如何となれば、平均三、四俵の田、五、六俵も<sup>(収穫)</sup>取実を得る故なり。もしこの取実を分外の物となして、年々その田に入るときは、千歳といえども、繁茂して、年々取実を増すこと、疑なし。これ我が道、一反よりして千万町に及ぶの法、満ちて溢れず、高くして危からざる大道なり。」満つるは欠き、欠くは満して、常に天行健なる天道に即して「終始一を踏む」人道を全くするところに、「天道人道相和してその身に備わる」天人一貫の道があるのである。

## (二) 天道の優位性

「半ば天道に順い、半ば天道に逆らう」人道は、その「順逆相須つ」ところ、まさに「天行の健に法り、自ら躰めて息まざる」天人一貫の道である。語録80に曰く、「天道は人道と異なるなり。天道は自然にして、人道は自然にあらざるなり。何となれば、すなわち田畝は荒れ、家屋は<sup>こわ</sup>壊れ、衣服は<sup>へ</sup>敝れ、溝渠は埋まり、隄防は<sup>つひ</sup>潰ゆ。人、五穀を食するために、田畝し、雨露を<sup>(みそ)</sup>庇うために、家屋、寒暑を防ぐために、衣服、田畝に<sup>(水をそそぐ)</sup>灌ぐために、溝渠、水害を除くために堤防あり。且つそれ人の生るや、羽毛もなく、瓜牙なし。故に、衣なくして、裸居する能わず、家なくして、露処する能わず、穀なくして、草食する能わず。故に、聖人、人道を立て、もってその<sup>(生活)</sup>生養を安んず。もとよりこれ自然にあらざるなり。それにただ自然にあらざらず、故に、勤めざれば、すなわち保つ能わず。これをもつて、君子は天行の健に法り、自ら躰めて息まざるなり」ここでも、尊徳は天道自然のままでは人間の身体生活は維持せられないから、「半ば天道に逆らう」意味で天道より独立の自律的人

道を説きながらも、「天行の健に法る人道」を説いているのであって、如何なる場合にも無制約的な人道絶対主義を説いているのではない。その人道なるものは、「半ば天道に背き、半ば天道に随う」立場に立ち、いわゆる「米喰虫の仲間にて立てたる」「人体より出でたる癖道」として、「天道とは格別なること、論をまたず、然りといえども、天道に<sup>な</sup>違うにあらず、天道に順いつつ、違うところある道理」が明瞭に説かれているのである。この点について、委曲を尽して説く夜話114に曰く、「儒に『<sup>(大学第一章)と</sup>至善に止まる』とあり、仏に『衆善奉行』と云えり。しかれども、その善というもの、如何なるものぞということ、たしかならぬ故に、人々善を為すつもりにて、その為すところ、みな違えり。それ元、善悪は一円なり。盗人仲間にては、よく盗むを善とし、人を害して盗みさえすれば、善とするなるべし。然るに世法は盗みを大悪とす、その懸隔かくのごとし。しかして、天に善悪あらず。善悪は、人道にて立てたるものなり。たとえば、草木のごとき、何ぞ善悪あらんや。この人体よりして、米を善とし、<sup>(糶)</sup>はぐさを<sup>(ひえ)</sup>悪とす。食物になると、ならざるとを以てなり。天地、何ぞこの<sup>わか</sup>別ちあらん。それはぐさは<sup>は</sup>生えるも早く、天地生々の道に<sup>しんが</sup>随うこと、速かなれば、これを善草というも、不可なかるべし。米麦のごとき、人力を借りて生ずるものは、天地生々の道に随うこと、はなはた<sup>うかつ</sup>迂濶なれば、悪草というも、不可なかるべし。しかるに、ただ食うべきと食うべからざるとをもつて、善悪を分つは、人体より出でたる癖道にあらずして、何ぞ。この理、知らずばあるべからず。それ上下貴賤はもちろん、貸す者と借る者と、売る者と買う人と、また人をつかう者と人につかわるる者にひきあて、よくよく思考すべし。世の中、万般のこと、みな同じ。彼に善なれば、これに悪しく、これに悪しきは、彼によし。生を殺して喰う者は、よかるべけれど、喰われるものには、はなはだ甚し。しかりといえども、すでに人体あり。生物を喰わざれば、生を<sup>と</sup>逐ぐること、能わざるを如何せん。米麦蔬菜といえども、みな生物に<sup>(われ)</sup>あらずや。予、この理を尽し、

見渡せば遠き近きはなかりけり

己れ己れが住処にぞある

と詠めるなり。されども、これはその理を云えるのみ。それ人は米喰い虫なり。この米喰い虫の仲間にて立てたる道は、衣食住になるべき物を増殖するを善とし、この三つの物を損害するを悪と定む。人道にていうところの善悪は、これを定規とするなり。これに基づきて、諸般人のために便利な善とし、不便利なるを悪と立てしものなれば、天道とは格別なること、論をまたず。然りといえども、天道に違うにあらず、天道に順いつつ、違うところある道理を知らしむるのみ。」いわば「廣大無辺にして年々歳々我が好むところに倚らしめる」天道という大きな水流は、人体という堰によって一応塞ぎ止められて、しばし逆流し、勢位を高めてまた流れ下るのである。

もともと「人身あれば、欲あるは、すなわち天理なり」（夜、6）という現実には、如何ともすべからざる事態である。夜話 227 に曰く、「仏家にては、『此の世は仮りの宿なり、来世こそ大切なり』と云うといえども、現在君親あり、妻子あるを如何せん。たとい出家遁世して、君親を捨て、妻子を捨つるも、この身体あるを如何せん。身体あれば、食と衣との二つがなければ、凌がれず、船賃がなければ、海も川も渡られぬ世の中なり。故に西行の歌に、捨て果てて身は無き物と思えども

雪の降る日は寒くこそあり

と云えり、これ実情なり。」かかる已むを得ざる実情よりして、「それ天に善悪なし、故に稻と莠とを分たず、種あるものは、みな生育せしめ、生氣あるものは、みな発生せしむ。人道はその天理に順うといえども、そのうちに各區別をなし、種・莠を悪とし、米麦を善とするがごとき、みな人の身に便なるを善とし、不便なるを悪となす」（夜、2）のほかはないのである。その限り、人道は「人体より出たる癖道」として、天道を無視して一本立ちのできる道ではなく、「天理に随うといえども、また人為をもって行方を人道と云う」（夜、181）とも、「天理に随うといえども、また作為の道にして、自然にあらず」（夜、5）とも云われるのである。天道と人道との関係は、「半ば順い、半ば逆らう」順逆相須つ力動的相即関係なのである。

かくて「天理に随うといえども、人為をもって行方」といわれるととも

に、また「天道にたがうといえども、天またこれを助く」といわれるところに、まさしく天道と人道との力動的相関関係の本質があるのである。秘稿下 418 に曰く、「天道人道の異なる所以は、如何。天道自然は、人間鳥獸虫魚は生きとして生ける者皆食を求むるの外他なし、その内鳥獸虫魚羽毛ありて、風雨寒暑を防ぐ。人は羽毛なし、故に寒くして衣、屋を作りて、風雨を防ぐ。これ天の分にあらず。この故に、天道これを滅す。然りといえども、天に違うて、田畑を耕し、屋室を作為して、勝手に用いたるを恐れて、わが分内を譲り、時々刻々も忽せにせざれば、天道にたがうといえども、天またこれを助く。今、国家安穩無事、故に貴賤も別に官服あり。己がほしいままに、分を守らず、珍器珍物を好み、終に驕奢に陥り、大となく、小となく、分を失い、困窮に陥る、歎かざるべけんや。」羽毛鱗介なき天分をうけて生れた人間は、天道に半ば背いて、着物をつけ、家屋をつくりて住むほかはないのであるが、その分を守りつつましくして、よく勤め、よく譲り、驕奢にはしり怠け奪うことなければ、半ば「天道にたがうといえども、天またこれを助く」るのである。天より賜わった身体を養い保つ必要上、やむなく天道自然に背いて、田を耕し草を取るのであるから、天道に背いても、天はこれを諒とし、これを助けるのである。「米食虫の仲間にて立てたる」人道は、天道とは格別ではあるが、全面的に天道に反するのではなく、窮極的には、「天道に順いつつ」、やむなく「違うところがある」のである。すなわち大手をふって天道自然に背くのではなく、天から与えられた身体的生命をまともに生かすために、やむなく敢えて天道自然の成り行きに任せないで、人作人為の人道に勤めるのである。その限り、天道に半ば背く人道は、いわゆる「天に対して申訳けなき」気持よりする、謙虚誠実な営みである限り、「天道にたがうといえども、天またこれを助く」るのである。自信に満ちた大威張りの人道ではなく、やむを得ず天道自然に背いての人道であることを明確に説くのは、夜話 115 である、「世の中、用をなす材木は、みな四角なり。然りといえども、天、人のために、四角なる木を生ぜず。故に、満天下の山林に、四角なる木なし。また皮もなく、骨もなく、かまぼこのごとく、

はんべんのごとき魚あらば、人のため便利なるべけど、天これを生ぜず。故に、満々たる大海に、かくのごとき魚、一尾もあらざるなり。またくもなく、こもなく、白米のごとき米あらば、人世この上もなき益なれども、天これを生ぜず。人に、全国の田地に、一粒も、此の米なし。これをもって、天道と人道と異なる道理を悟るべし。また南瓜を植えれば、必ずああり、米を作れば、必ずああり。これまた自然なり。それこと米は、一身同体なり。肉と骨も、また同じ。肉多き魚は、骨も大なり。しかるをこと骨とをこ、米と肉を欲するは、人の私心なれば、天に対しては、申し訳けなかるべし。然りといえども、今まで食いたる飯も、餒えれば、喰うことの出来ぬ人体なれば、仕方なし。よくよくこの理を弁明すべし。この理を弁明せざれば、我が道は、

了解すること、難く、行うこと難し。」天から賜わった身体を保つために、その必要上やむなき事情に由るとはいえ、天道自然に背いて身体を維持する衣食住中心の人道は、天道に気兼ねする「申し訳けなき」気持ちから出るものとして、あくまで謙虚篤実な心で営まれる限り、「天道にたがうといえども、天またこれを助くるのであるが、もしそれが驕慢放埒な心より出るときは、必ず天人ともにこれを許さないのである。すなわち尊徳は驕慢放埒の徒(天命)にたどりつく末終を次のごとく説くのである、「物おのおの数あり。猛火の炎々たるも、薪炭尽くれば、すなわち銃む。銃丸の激烈なるも、勢尽くれば、すなわち童子の弄ぶところとなる。人高官に陞り、君寵を得るも、また何ぞ久しきを保た黜ん。その数、尽くれば、黜罰たちどころに至る。あに思わざるべけんや」(語159)。

かくのごとく驕慢没落の道を迎るのも、「全く天命を弁えず」して「我意を押し張る」(全一、947)が故である。「それ人は天地の間に生育し、天地の間に住むは、天地の令命にして、背くべき理あらんや。四季順にして、寒暑の変化、年々の豊凶、順なるものは、忠孝慈愛その中にありて、終に榮えて長久なり。背くものは、倭邪惡凶その中にありて、終に亡び長く断絶す」(全一、577)。

結局如何に人道に努め勤しむにしても、人間は窮極的本来的には天道とい

う絶対的軌道を離れ疎外することはできないのである。人道は天命を伸縮し、その軌道を調整し、その局面を再組織し得るのみで、その質料や法則までも創造し得るのではない。太陽の光と熱とが地下一尺にしか及ばぬとき、それを更に一尺掘りおこせば、太陽の光と熱とは地下二尺に及んで、米穀は増収されるであろうが、その際地下二尺まで掘りおこす人道は、太陽の光と熱や重力などの法則そのものとしての天道自体を変革し得るものではない。人道は天道自体の布置を若干変更し、その軌道や方向に若干参与し得るにすぎない。夜話126において、尊徳は

かくれ沼の藻にすむ魚も天伝う

日の御影にはもれじと思う

という和歌について、次のように説いている、「この歌、面白し。それ米は地より生ずるようなれども、元は天より降るに同じ。太陽日々天より照すところの温気が地に入り、その力にて、米穀は熟するなり。春分耕し初むる頃より、秋分実のるまでを尺杖のごとく図して見よ。(グラフ)十日照れば、十日だけ、一月照れば、一月だけ、地に米穀となるべき温気が入りている故、たといその間に雨天冷氣等がありといえども、それまで照りこんでいるだけは、実のるなり。しかれども、人力を尽さざれば、実のり少きは、耕しこきこきこの功多ければ、太陽の温気地に入ること多きが故なり。地上万物、一つとして、天つ日の御影にもれたる物はなし。海底の水草すら、雨天冷氣の年は、繁茂せずといえり。さもあるべし。この歌、歌人の詠めるには、珍らし。」「地上の万物、一つとして、天つ日の御影にもれる物なき」ところ、天道はそのうちに流速や流の方向を変える人道の水流をも収めて悠容として流れ行く大河そのものである。人道は天道に対立しつつ、天道と相和し、天道を粧い飾り、天道は対立する人道を包摂してその天行健全なのである。

⇒ 「非・理・法・権・天」——魚と水

如何に驕慢勢位を逞くし、時にその威勢天を凌ぐことあるも、究極的には天に勝つことはあり得ぬのである。夜話147において、尊徳はいわゆる楠木

正成の旗文字「非・理・法・権・天」（非は理に、理は法に、法は天に勝つことなし、天は明らかにして私なし）を取りあげて、次のように語っている、「理・法・権ということは、世に云うことなり。非・理・法・権・天と云えるは、珍らし。世の中はこの文の通りなり。如何なる権力者も、天には決して勝つことできぬなり。たとえば、理ありとて、頼むに足らず、権に押さるることあり。且つ理を曲げても、法は立つべし。権をもって、法をも圧すべし。しかりといえども、天あるを如何せん。俗歌に『箱根八里は馬でも越すが、馬で越されぬ大井川』といえり。そのごとく、人と人との上は、智力にても、弁舌にても、威権にても、通らば通るべけれど、天あるを如何せん。智力にても、弁舌にても、威権にても、決して通ることのできぬは、天なり。この理を仏には無門関といえり。故に平氏も源氏も、長久せず。織田氏も豊臣氏も、二代と続かざるなり。されば恐るべきは、天なり。勤むべきは、事（天につかえる）の行なり。世の強欲者、この理を知らず、どこまでも際限なく、身代を大にせんとして、智をふるい、腕をふるうといえども、種々の手ちがい起りて、進むことあたわず。また権謀威力を頼んで、専ら利を計るも、同じく失敗のみありて、志をとぐること能わざる、みな天あるが故なり。故に大学には『止まるところを知れ』と教えたり。止まるところを（次第に）知れば、漸々進むの理あり。止まるところを知らざれば、必ず退歩を逸れず、漸々退歩すれば、終に滅亡すべきなり。且つ『天は明かにして、私なし』と云えり。私なければ、誠なり。中庸に『誠（21章）なれば、すなわち明らかなり、明らかになれば、すなわち誠なり』『誠（20章）は天の道なり。これを誠にするは、人の道なり』とあり。『これを誠にする』とは、私を去るを云う。すなわち己れに克つなり。むつかしきことはあらじ、その理よく聞えたり。その真疑に至っては、予の知るところにあらず。』

かくして天は一切に君臨する主宰的超越者であるところから、天保十二年四月、五十五才の尊徳は鶴沢作右衛門宛の書簡において、決然として次のごとく説いている、「それ天道に基づくときは、すなわち成る。人道に基づくときは、すなわち廢す。天道とは、天地開闢より万々世に至るまで、日夜自

転運動して、万物發育す。人道とは、天地の造化に生れ、これを食ひ、これ（着）を衣るのみ。たとえば、魚の水中に住めるがごとく、水の変満するは、すなわち天道なり、魚の遊行するは、すなわち人道なり。この故に、水の浅深に因って、漁の大小、自（着）から定まる、魚の大小によって、水の浅深を極むべからざるが如し云々」（全六、909）究極的には天道の人道に対する優位性は、動かせぬものがあるだけに、実践的には終始天道に対する人道の実践的主体性を高調しながらも、後年になるほど、尊徳は敬虔なる求道的心情をもって天道の超越的な光のもとに天人一貫の道を求める態度を持てかわらなかつたのである。人の道はついに天の光によってのみ見出されるのである。

註 この点に関しては、尊徳が天保二年四月『經典余師周易』七巻を求めたことを一応注意してよいであろう（全十一、928）。

#### 四 「木かげにも道のありける月夜かな」

この点で求道者二宮尊徳の姿を浮彫りにするものは、相当晩年に書かれたと思われる小田原藩士某に宛てた書簡の中の一句である。この書翰において、尊徳は一貫して榮華と名聞に眼眩みて天道に基づく人道を見失うことを警しめる立場よりして、「天地人の三才和合して」作物も成る故に、「天地人三才を知らざれば、國家を平治すること能わず」（遺稿、543）と説き、弓の修行においても、よく勉めて的を失わず、心楽しく命長ければ、「万事一時に成る、これすなわち天道なること」（同上541～2）を説き、また治政家として人倫を正し上下分限を守り、「もって天地の道を楽しみ候哉」と問い、「この道怠るときは、高位大禄または美服を着したりとも、天道より見たまえば、小人」（同上、541）と断じ、さらに名聞に心を奪われて道を見失うことなく、「上、天道なれば、世界白日にして、万民安堵なり」（同上、543）と説き、その各提言の終に、「木かげにも道のありける月夜かな」という一句をくりかえして掲げているのである。村道はもとより、山道も夜間踏破した巨軀の尊徳が、木の間からさし入る月影によって羊腸の小径を見出すことに托して、天の超越的な光のもとにのみ人の道が照し出されることを詠

じたこの一句には、如何に天道に対立する人道もついに天道の光のもとにのみその正しき軌道を見出し、人は窮極的には「天地と共に行き、勤め、尽す」よりほかにその行くべき道はないことを示している。

#### (五) 「百万騎の勢」の天道

しかし一般的には、天運非なるに及べば、人は天の光のもとに行くべき道を求める敬虔な態度などさらになく、ひたすらにもがきにもがき、我意を張り、いよいよ窮地におちこむのである。上掲の鶴沢宛の書簡に続けて曰く、「年歳の豊凶は天命に候ところ、人力才智をもって、あるいは家格、あるいは仕来りなどと、我意を押し張り、禍福吉凶をこねまぜ、つまり豊凶も分たず、あるいは売りかえ、あるいは取り越し、あるいは借りかえ、あるいは成し替え、借錢にて日を送り、あたかも魚の泥に漂うごとく、分度を失い、困窮いたし居り候儀」つき云々」(全六、909)。天命まさに止まるべきところがあるのに、「我意を押し張り、」あれこれとじたばたもがくのは、「魚の泥に漂うがごとく、分度を失い、困窮いたす」だけで、天道の圧倒的な力の前には、天道に「半ば背く」どころか、一たまりもないのである。見聞記31に曰く「天道は、昼夜止むことなく、破滅するをもってす。これに従うもの、家にく鼠あり、田畑へは、<sup>けもの</sup>獣出て破る。天道の大なるに、右等の味方あれば、たとえば百万騎の勢にて、僅かの人道を攻むる故に、勇気をはげまし、銘々家業をはげまねば、天道に攻め滅ぼさるるなり。」

#### (六) 「善悪の行司」としての天道

このように云われるわけであるから、天保十一年一月の藤曲村仕法書に示されているように、天道百万の敵にはじめから無条件に降服し、分度も守らず、家業に励む人道も放棄して、「自分より不運と名付け、何程身心を勞すといえども、その甲斐なしなどと迷う、至極の場に居て、悟道を極め、我意を張り、驕奢に募る」(全一、948)などして、自暴自棄的に我意を恣いままにして、驕慢没落の道を行く者あれば、十七才の少年二宮金次郎のよう

に、酒匂川の洪水が百万騎の勢をもって迫って来て、その田畑をすべて荒廃せしめたとき、赤裸裸身荒地に捨苗を植えれば、天地はその誠に感応して米一俵を恵むのである。その限り、天道はただ人道を百万騎の勢で圧倒する暴君的権力だけではなく、非・理・法・権をこえる天として、人間の行道に対して公正な審判を下す「善悪の行司」である。見聞記32に曰く、「天道は、世界善悪の行司なり。作物へ肥しを入れれば、肥しを入れただけ、実のりを得、また不精(なまけて)にして、肥しを入れざれば、実のらず。善事を修むれば、天道、うちわを勝負力にあぐ。」さらに道話44にも曰く、「『仁を欲して仁を得たり』と云うは、米を欲して、肥をやりて、米を得、大豆を欲して、肥をやり、大豆を得るがごとし、万事得ずということなし。天道は善悪の行司なり。」身体を勞して誠実に勤勞して、大豆を蒔き育てれば、その人道の善を善として判断し、大豆の実を実のらせるのが、善悪の行司としての天道なのである。その善悪何れの道をえらぶかは、各人に委ねる天道は、善悪の対立をこえている。善悪の何れかに<sup>く</sup>党し、その取捨是非の判定に急ぐ裁判官ではなく、行司としての天道は善悪の何れにも党みせずして、その何れをもひとしく受容する太っ腹な「胴取り」(親方)なのである。道話43は、対偶一円不正不転の天道について、次のごとく説いている、「誠は天道なり、息むことなし。今日暮るれば、夜になる。夜更れば、明ける。先刻が今になり、今日が明日になる。新しき物は古くなる。作らぬ穀(穀物)はできぬ、天道、依怙<sup>えこひ</sup>最負なし。善にも、悪に与らず、善悪一如なり」。人道は身体に都合よき稲を善とし、身体に都合のわるい莠を悪とする一肢偏執的であるが、天道はその何れに対しても一視同仁的に両肢受容的である。すなわち「人道は受に与し、施を悪む」が、「天道は受に与し、施に与す」るのであり、「人道は楽に与し、苦を悪む」が、「天道は楽に与し、苦に与す」るのであり、「人道は賞に与し、罰を悪む」が、「天道は賞に与し、罰に与す」るのである(全一、399~400)。善悪の何れかの一肢に偏する人道に対し、天道の太陽は、善悪の何れをも平等に照す廣大無辺の超越的絶対者として、一円空そのものなのであるが、人間の運命を決定的に操る暴君的存在ではなくして、人にしてよく「人事を尽

して」「天の冥加」を祈る謙虚誠実な人道の立場に終始して、「天に率い」  
「天に倚る」ならば、「善悪の行司」としての天は、また「その性に感激し  
て、これに与うる厚薄あり」（全一、30）なのである。

#### (七) 天の一視同仁的感応性

ことに弘化三年六十才の尊徳はくりかえして各地の仕法関係者に次のよう  
に説いている、<sup>(豊年と不作)</sup>「豊凶・熟不熟は、天にありて、人力の及ぶところにあらず。  
また耕し<sup>(くし)</sup>転<sup>(り)</sup>り、蒔き仕付け、水の掛<sup>(か)</sup>け干<sup>(び)</sup>、蒔り取り、扱<sup>(あ)</sup>き纏<sup>(まと)</sup>いの儀、人に  
ありて天にあらざるの理<sup>(ことわり)</sup>」をよくよく承諾いたし、いよいよ相励み、一同人  
事をつくして、天の福を相祈り、御趣意を安んじ奉り申し度く候」（全七、  
802～819）。かかる「人事をつくして、天の福を祈る」人間の至誠に対して、  
天道は身分の高下貴賤を問わず一視同仁的に感応するのである。秘稿上31に  
曰く、「今、早<sup>(ひでり)</sup>魃<sup>(はなはだし)</sup>あり、百万石の加州侯の雨乞いにも、賤の女<sup>(小面蔵)</sup>の三<sup>(三)</sup>畝<sup>(畝)</sup>五<sup>(五)</sup>畝<sup>(畝)</sup>  
<sup>(穀物)</sup>粟のために、雨を祈るも、天意感通にいたっては、同じ。高下貴賤は見えぬ  
ものの、降らす雨なればなり。加州侯のお頼み故、聞かずばなるまいとい  
うくらい、貴賤の別るものに、降らすも照らすも、出来ず。」この章節を語  
録365は次のごとく正式に書いている、「早魃<sup>(ひでり)</sup>虐<sup>(はなはだし)</sup>をなす。この時にあたり、  
加州侯、百万封境<sup>(領地)</sup>のために雨を祈り、小農、教畝<sup>(天地の差)</sup>田園のために雨を禱<sup>(いの)</sup>る。大  
小貴賤、霄壤のごとしといえども、至誠天に通ずるにいたっては、すなわち  
一なり。何となれば、蒼天いづくんぞ大小貴賤<sup>(差別)</sup>を弁別することあらん。もし  
これを弁別するありて、小農の禱を措いて、加州侯の祈を<sup>(う)</sup>允さば、すなわち  
いづくんぞ、よく旱をなさん、いづくんぞ雨をなさん。いやしくも我が道を行  
う者は、よろしくこの理を体認すべし。」まさに「上、天命に配し、下、  
人心に合する」天人一貫の道を「天地と共に行く」者の眼中には、その至誠  
を傾けて天につかえる限りの人間は、百万石の大名も一介の小農・農婦も、  
ひとしく「天の自然に下し給える人々」として一視同仁的に天にその至誠を  
受容せられ感応せられるのである。かかる一円仁の天の心そのものに生きる  
尊徳は、加賀百万石の大名も一介の農婦もひとしく「天の分身」として何等

差別はないとするところに、報徳仕法の根本精神があるとしたのである。報  
徳仕法の根本精神の原型をなすものは、一円空にして一円仁、「万物を恵み  
て、形なき」天の心そのものである。

#### (八) 空仁一体の天

すでに百万石の大名と一視同仁的に一介の匹夫匹婦の至心に感応する天で  
ある。実に天はただ時あって、「百万騎の勢」をもって人間を圧倒する専制  
的暴君であるに止まらず、人間の至誠実行を公正にうけとめる「善悪の行  
司」として、小農の至心にも感応するとともに、さらに人間がよく自由意志  
をもってその場に帰入すれば、それを受容して、よく大をなさしめる、「形  
なくして恵む」一円空にして一円仁の广大無偏の超越的地平として「誠」そ  
のものである。

実に「天の道」は「誠」であり、「これを誠にする」「人の道」は、その  
至誠躬行において、その極に達する。すなわち、至誠はその天人合一性にお  
いて「人道の極」である。

ここから尊徳は全快の望なくとも、父母の看病に全力を傾ける孝子や水害  
のおそれがあっても、農耕に精一杯努める農夫などの至誠躬行を「人道の  
極」とするのである。語録397は「余、毎に謂う、父母の疾に侍し、ひそかに  
歎じ、以って全快期すべからずとなす者は、いまだ父子の親を<sup>(したしみ)</sup>尽す能わざる者  
なり。魂去り餓冷ゆといえども、なお全快をねがう者にして、人道を尽すと  
いうべし」と説いて「<sup>(里仁篇)</sup>論語の幾諫章のごときは、人道の極と謂うべし」と断  
じ、さらに酒匂川の洪水の体験をふまえて、語録400は次のごとく説いて  
いる、「<sup>(耕作)</sup>河辺の民にして、水害にかかるを憂いて、耘培せざる者あり。これ遠  
き慮あるがごとし。水害にかかる知りて、しかも耘培に務むる者あり。これ  
はなはだ拙きがごとし。しかれども、遠き慮あるがごとき者、必ず貧に陥  
り、はなはだ拙きがごとき者、必ず富に至る。何となれば、すなわち拙きご  
とき者、拙きにあらずして、篤く農を勤むるなり。これあるいは、論語の幾  
諫章に合し、人道の至なり。遠き慮あるがごとき者は、これに反す。父母諫を

容れずとなして、諫めざるがときは、これ豈に人の子の道ならんや。」実に天の道が誠そのものである以上、その誠の道に帰し、「天地と共に行き、天地と共に勤め、天地と共に尽す」至誠大孝の道は、「人道の極」「人道の至」として、「人道を発して天道を粧い飾る」ものであり、「天に率いて事を成さんと欲する者は、大いに成る」のである。天保三年改めの「報徳現量鏡」の末尾には、

植え去り植え去り思わず田となりし

の一句を掲げ、次のごとく記されている、「孝悌の至りは、神明に通じ四海に満つ。詩に曰く、『西より東より北より南より思いて服せざるはなし』それ人は天に率いて事を成さんと欲する者は、大いに成るものなり。農夫、田を耕さんと欲せば、国土、田となる。稲を植えんと欲せば、国土、青田となる。この二業は、天地のなすところにあらず、全く人力のなすところなり。稲を植えれば、天地これに生育を加えて、人力を助く。しかして五穀をして実を結ばしむ。人毛々の身を以てす。天地広大にして偏るところなし。年々歳々我が好むところに倚らしむ。これすなわち事を成さんとする者、大いに成るものなり。(全十二、530)とあるが、これと同文を記す「三才独楽集」においては(全一、888)、その次に、

植え去り去りつくせば青田かな  
おもい尽し勤め尽して青田かな  
馳馬に鞭打ち出づる田植かな

とあり、ここには広大無偏の天に倚り大を成す人道のすがたが示されているとともに、大成期の天道観の核心が示されている。

「広大無偏」の天は「我が好むところに倚らしめ」て、よく「大いに成る」ことを得せしめるというからとて、人は天の広大無偏のに乗じて、何もかも自由になると思い込み、いわゆる自力をたのみ得るのであろうか。その点では、尊徳は断乎として単純な自力主義を否定して、自己の依るべき一切のものは、天地人三才の徳の賜物であると、明確に断定するのである。すなわち語録454に曰く、「百花楓葉、百穀菜果、みな草木の力に成るにあらず、

ことごとくこれ造物者の為すところなり。しかりといえども、これ見聞の及ぶところにあらず。故に人もって草木の力となすなり。洪鐘も、また然り。人手と撞木とを仮らざれば、すなわち鳴る能わざるなり。人もまた然り。修身謹行、知識才芸、もって榮達の福を得る者、みな祖先の陰徳累世積善および神靈冥護の力に因るなり。一として自力の得て為すところにあざるなり。然るを見聞及ばざるをもって故自力となす。また繆まらずや。」かくして人間はその恃む徳行・知識・才芸等の長所もあげて天地人三才の徳に負うものとして、すべては窮極的には「形なくして万物を恵む」天より賦与せられるのである。広大無辺にして一切の善悪・貴賤等の相対的差別をこえて万人を受容する一円空の天は、また同時にその至誠実行の人道によりて天に倚りその心に帰服する限りの人々を大成せしめる一円仁の「本の父母」または「元の主」そのものである。まさに「万物を恵みて形なき」天は、空仁一体の「本の父母」である。それでは「本の父母」としての天と現実の人間と気脈を通ずるパイプは、何であらうか。天は百万石の大名とひとしく一介の匹夫匹婦の至誠に感應するといわれ、「大円鏡」附鏡には「神(仏・聖)の体気は我が体に通じ、我が体気は神(仏・聖)の体に通ず」(全一、125～7)とあるが、天(神・仏・聖)と人間(我)との間に気が通うのは、実に天が作った人間の身体を通じてである。

#### (九) 天道と人道の切点としての身体

もともと天道と人道とは、先づ対立し相反するものとして、随所にその区別が説かれていることは、上來見て来た通りである。「道の道とすべきは、人の道なり、天の道にあざるなり。天の道となすべきは、天の道なり、人の道にあざるなり」(全一、395)と明確に天道と人道とが対立的に区別せられ、「原野を田畑となすは、人の道なり、天の道にあざるなり。田畑を原野となすは、天の道なり、人の道にあざるなり」(全一、394)といわれるとともに、「田畑を米穀となすは、人の道なり、」天の道にあざるなり。草木を田畑に生ずるは、天の道なり。人の道にあざるなり」(全一、395)



とせられるのであるが、かく天人対立するに至る根柢は、天道のままに任せば、一日も維持できぬ人間の身体的生命にある。天人分裂の原理は、人間の身体である。しかももともと天道が先にあつて、いわゆる天命によって人間の身体も生じ、従つて人道も天道——半ば背き、半ば順うにしろ——があつてはじめて成立するのであるから、「それ元、一円の天道なり、天道なければ、すなわち人道なし。天道あれば、人道あり云々」(全一、404)といわれ、その限り、既述のごとく、窮極的には、「それ天道に基づくときは、すなわち成る、人道に基づくときは、すなわち廃す」(全六、909)といわれ、天道と區別される人道も「天道に違うにはあらず、天道に順いつつ、違ふところある」(夜、114)のであり、よく天を畏こみ人道に誠をつくせば、「天道に違ふといえども、天またこれを助け」(秘下、418)るのである。弘化三年二月の「吉凶哀悦下案」に六十才の尊徳が「天道自然、蒔けば生え、植えれば育つ人倫の大道」(全一、1156)と七回もくりかえして書く所以である。この点は、次のようにまとめられている。「それ元、一円の原なり。国民衣食に乏しく、天に従いて地の理を量り、天に逆いて田畠を開く。天に従うは、自然なり。これを名づけて、天道と謂う。人を以つて作事を為す、これを名づけて、人道という。人道は田畠を開き、天道は田畑を廢す。人道は五穀を植え、天道は生育をなす。天道は自然をなし、人道は作事をなし、天道人道と和して、百穀実のりを結ぶ。原一変して田となり、田一変して稲となり、稲一変して米となり、米一変して、人となる」(全一、393)。

まさに「天道、人道と和して、百穀実のりを結ぶ」ところに、「天道自然、蒔けば生え、植えれば育つ人倫の大道」が成立し、「天道人道相和して、自然その身に備わる、これを道という」(全一、469)と「悟道理論草案」中の「天命の解」に明示されている所以である。人道の作為も天人一貫的に天道と和するに至り、眞の道が自然そのものとして「その身に備わる」ところから、自己の身体を養う勤の道は「天道の自然」と呼ばれ、他に施す讓の道は「人道の自然」と呼ばれるのである、すなわち「身を勞して田を耕し、田を耕して稲を得。稲を植えて米を得。米を喰いて体を養い、体を養いて寿を保

つは、天道の自然なり。」「身を勞して田を耕し、田を耕して稲を植え、稲を植えて米を得て、米を施して民を救い、民を救いては国を得るは、人道の自然なり」(全一、392)。しかし「天道の自然」と「人道の自然」との間には、次元の差があるのである。身を勞して米を得て、体を養い、寿を保つ「天道の自然」は、「天道自然、蒔けば、生え、植えれば、育つ人倫の大道」にはかならないが、それにもまして百尺杆頭一步を進めて、身を勞して得たその米を民に施し、人々を救う「人ため」中心の「人道の自然」ともなれば、まさに一円空にして一円仁に住するの天の「形なくして万物と恵む」心そのものを体现し、人にして天に参じ天と行を共にするのである。ここにいたれば、「本来、人道を發して、天道を粧い、仁義を發して人道を粧い、人道興りて、天道を飾り、仁義興りて、人道を画す」(全一、404)るものである。実に「天道を飾り粧う」「人道の自然」こそは、天人一貫的に「天道人道相和する」「人道の極」である。かかる天人合一脱体现成の場が、「天道人道相和して、その身に備わる」といわれるごとく、人間の身体そのものであることこそ、決定的に重大な意味をもっている。さきに見たごとく、身体は自己中心的に天人分裂の原理であつたが、今やその身体が脱体现成的に天人合一の原理そのものとなり、天人分裂の原理として「不義の器」(パウロ)「臭皮袋」(道元)であつた身体は、今や天人合一の原理として「義の器」「道器」となるのである。すなわち身体は天と人の切点なのである。

すでに語録454によって示されたように、人間存在の後天的な徳行・知識・才芸等のすべてを天地人三才の徳に負うのであるが、人間存在の先天的根本条件をなす身体そのものは、「我が体は我が氣をもつて作ること能わず」(全一、352)といわれるごとく、如何なる意味でも自力で創造されるものでなく、全面的究極的に「形なくして万物を恵む」天そのものにその生成を負うのである。実に「天地間にある物、我が身をはじめ、あらゆる物みな天の作らざるものなし」(全一、398)といわれる所以である。現に我がここに在るのは、あげてこの身が「形なくして万物を恵む」天から与えられたからである。我が存在は窮極的にはすべて天に負うのである。我在るは、我が身在

るによりてであり、我が身あるは、天によるのである。明晰判明にして疑う余地なき哲学的第一原理を求めて、デカルトは「我、<sup>(意識す)</sup>思う、故に我あり」の命題に達し、その我を可能にするものとして、我の底に我を刻々創造し保持する神の存在を推定したのであるが、二宮尊徳は人間の全生命を支える身体そのものを生んだ究極実在としての天、すなわち我が身の上の天に帰るのである。デカルトが如何に疑うも疑い得ぬ明証的認識の原理を中心的問題とするのに対し、尊徳は終始如何に生きるかという具体的実践の体得を窮極的目標として、「先づ此の身は如何にして生れ出しや」(夜、201)と自他に問いかけ、「我が身の元」を究め、我が身体の成立そのものがいわゆる天命に基づき、天の徳そのものに負うことを明らかにし、我が身が「天の分身」であることをつとめ、一切の人間活動の原動力をなす身体そのものが天によって与えられるところに、報徳哲学の窮極根柢を見出すのである。ここに天道の人道に対する本質的決定的優位性の動かせぬ明証が証示せられるのである。実に人間の身体には、天命とよばれる宇宙的超越的運命的限定がひそむのである。如何なる容貌・体格・体液・情緒・性向を享けるかは、各人の自由意志の所産ではなく、まさに先天的超越的全体的限定の成果であり、すなわち身体の宇宙性そのものの問題である。

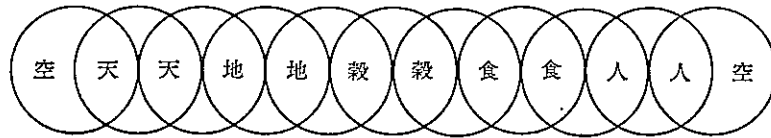
#### (十) 身体と天命

実に二宮尊徳は一世紀以上も前にいわゆる「身体の宇宙性」を明確に把握し、身体は「天の賜」であって「私物」ではないとして、語録322において次のごとく説いている、「人体は天地の靈氣に成る、故に私物にあらざるなり。然り而して、その恩を知らず、妄りに私欲を<sup>ほしいまま</sup>にする者は、天地必ずこれを罰す。畏れざるべけんや、懐しまざるべけんや。」かくて人間存在の一切の活動の前提をなし根元をなす身体は、「自然の天の命令」をうけ、「天地の靈氣」より成るものであって、「私物」ではなく、「天の賜」なのである。「我が身の元」は天そのものである、「天は、万物を恵みて、形なきものなり」といわれ、「地は、万物を現して、生育をなすものなり」といわれてい

るが(全一、409)「形なくして万物を恵む」一円空にして一円仁の天と「万物を現して生育をなす」地とが相会する間に、とくに今此処において、天と人との先天的切点として、「天命」によって現成したものが、身体である。身体において、天の氣と人の氣が通うところに、報徳哲学はその第一原理を見出すのである。

すでに「人間の生成」の項において見たごとく、一円空極から天地開闢し、て後、天命という宇宙的限定によって、もともと人間の身体も生れるのである。「悟道草書帳」に曰く、「それ元空一円一体、未だ天地開けずして、往来なし。天地開けて、身体生ず。身体あれば、心その中にあり。心の往来ありて、その中に発すれば、身体を發して、万世に至るまで、往事来事なきこと能わず、これを天理自然と謂う」(全一、417)。さらに曰く、「それ元一円一元なり。一元清濁して、天地をなす。いまだ天命を得ずして、体気なし。天命を得て、自然に体を受く。体を受くれば、自然に氣を發す。天命を得て、万世に至るまで、体気變満して、無きこと能わず、これ天理自然という」(全一、417、426)。すなわち人間の身体は「天命を得て自然に体を受け、」宇宙的に生成するのであって、「我が体は、我が氣をもつて作ること能わず」(全一、353)と云われるのである。すなわち先づ「自然に変化をなす、これを天道という、万物道なからざらんや」(全一、396)といわれる天道流行の間に「天地の靈命」によって、人間はその身体生命を得たのである。「自然に身体を得、これを天生という、万物生なからざらんや」(同上)。しかも身体を得た者は、また自然からその食物を得て、その恵みによって成長し生活するのである。「自然に養育を受く、これを天恵という、万物食なからざらんや」(同上)。かく身体のみならずその身体を養うものまで、天道自然に恵まれるのであるから、「生民は天地の化身なり」といわれるのである、[それ元、天地は万物の父母なり。天地なくして、万物あるなし。万物は生民の父母なり。万物なくして、生民あるなし。故に生民は天地の化身なり。如何となれば、天地の間に生じ、天地の化物を喰べ、天地の間に長じ、天地の間に終る云々」(全一、557)。

以上のごとく、「天地は万物の父母」であるとともに、「生民は天地の化身」であるという天人一貫の人間生成論は、また段階的に次のごとくとらえられている。「天は地に異ならず、地は天に異ならず、天はすなわち地なり、地はすなわち天なり。地は食に異ならず、食は地に異ならず。地はすなわち穀なり、穀はすなわち地なり。穀は人に異ならず。人は穀に異ならず。穀はすなわち人なり、人はすなわち穀なり」(全一、557)として、次の図式が掲げられている。



ここに、「天は万物を恵みて形なきものなり、地は万物を現して生育をなすものなり」(全一、409)という万物とくに人間の生成系列が図示せられているのであるが、人間は「形なくして万物を恵む」天の血脈を享けついでいて、その人間間の血脈には、天の永遠無量の寿と光が宿っているのである。岡田佐平治・庵原屋林助等に伝わった「二宮先生御説徳聞書」に曰く、「高野山に定灯明あり、人これを尊ぶ。千年余に及べり。また我々の身体あつたのあつた優かなるは、幾万年の定灯明ぞ、不生不滅を考うべきことなり。」ここに「我が身の元」すなわち我が身の超越的根柢があるのである。かくて「我が身の元」としての天から「天の分身」として生まれ出た人間は、その身を保つ「米喰虫」として勤・儉の人道に励むとともに、百尺扨頭一步を進めて、譲の人道を全くすべく、「仮りの身を元の主に貸し渡し、民安かれと祈る此の身ぞ」という「畢生の覚悟」よりして、「天地と共に行くべく、天地と共に勤むべく、天地と共に尽すべし」とする天人合一的絶対行動を全くするに及んで、その人は全き意味で「天の分身」そのものとなるのである。

## The Way of the Universe, The Way of Man

Yūkichi Shitahodo

Ninomiya Sontoku is regarded as an important representative figure in Japanese history inasmuch as he is seen to be exceptional both in his creative originality and his moral character. His real character is, however, not properly understood. In this paper I have sought to clarify the fundamental and essential structure of Ninomiya Sontoku's unique philosophy, and its basic view with regard to the relation between the Way of the Universe and the Way of Man.